
僕と私。

なつめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と私。

【Zコード】

Z9245M

【作者名】

なつめ

【あらすじ】

ペチトショップを「じんまりと経営する僕。ある日、来客がやつてくる。「犬を買い取ってください」と彼女は言つ。

富山で母と暮らす同性愛者の私。彼女の秘密を知るのは、親友のナオコだけ。

僕、はじまりのはじまり

彼女は閉店5分前にやつてきた。控えめに空けられたドアから入った隙間風に僕は身震いをした。外では12月の雨粒が静かに地面を濡らしていた。

彼女は店内を義務的に見回してから僕のほうへと歩いてきた。そして小さな声で僕に言った。「この口を買い取ってください」

彼女の足元には、ビーグルが小さく座っていた。雨に濡れたそのからだは小刻みに震えている。

彼女は続けた。「どうしても手放さなきゃいけなくなってしまつたんです」

「いや、でも…」と僕は答えた。「うちはペッシュショップなんで、買い取りはしません」

「でも他に頼めそうな場所が思いつかないんです」と言つて彼女は頭を下げた。「お願いします」

彼女はしばらくの間、そのままの姿勢で下を向いていた。髪がかけてある彼女の左耳はイタリアの美術館にあるオブジェのようにみえた。

「理由を教えてもらつてもいいですか?」

「手放さなきゃいけなくなつたんです」彼女は顔をあげて、同じ言葉を繰り返した。

僕は彼女の口から発せられるであろう次の言葉を待つた。

彼女の年齢は三十歳くらいだろうか。うつすらと化粧をしている。それは自然に、そして上品に、ほのかな色味を彼女の肌に与えていた。スカートの前で重ねられている手は、左耳とセットで彫られた芸術品のようだ。長いまつげが上下に何度も揺れた。とても上品なまばたきだ。全ての作業を放り出してでも、その仕草を眺めていたい気持ちになる。彼女はもう一度まばたきをしてから、僕の目を見て言った。「お願いします」

僕は鼻で小さくため息をした。彼女にはどうしても犬を手放さなければいけない事情があり、そしておそらくペットショップに犬を持ちこむのは彼女にとって最後の手段だったはずだ。僕が断つても、彼女がなんらかの方法で犬を手放すことに変わりはないだろう。

僕はもう一度小さくため息をついてから言った。「もしよかつたら、コーヒーでもどうです？ちょうど軒となりに喫茶店があるんで、少しだけ事情を聞かせてくれませんか」

私、ひみつ

私が自分の「特殊性」に気付いたのは16歳の夏、高校生活にも慣れ始めた7月の事だった。私があえて特殊性と呼ぶのは、それが世間一般においては、そう、特に日本においては、「かなり」がつくほどの少數派だからだ。

私が生まれたのは富山県。山に抱かれた美しい町だ。地震も少ないし、台風もこない。高校生にとつてはいささか刺激に欠ける場所ではあるけれど、土着傾向が強いのもうなずける。立山の頂から流れる雪解け水は、やがてその姿を川へと変え日本海へと注ぐ。時間は河口の河流のようにゆるやかに、しかし着実に進むべき方向へ流れしていく。

そこでは「受験戦争」と呼ばれるものは存在しない。せいぜい小競り合い程度。学生達は公立高校を目指して常識的に勉強する。私もそうだった。命を削るような覚悟で睡眠時間を割き、悪魔と戦うような剣幕でペンを動かすことは一度もなかつた。1日8時間は確実に眠つた。

高校入学時に平均よりも少しだけ低かつた身長は高さを競うたけのこのように伸びていった。大きく変化をとげる体にあわせるかのように、私の心に変化が起こつた。いや、変化なんて生温いものではない。転換期、とでも呼んだほうがいい。それは唐突にやつてきた。まるで道路を杖で適当につついたら温泉が湧き出てきたみたいに。

私はクラスメイトに対して特別な感情を抱いていることに気が付いた。思春期なんだからそんなことは当たり前だ、なんて思わないでもらいたい。私が通っていたのは女子高で、もちろん私も女の子

だつた。そして私が恋心を抱いた彼女の名はユキナといった。そう、私は同性に恋をしたのだ。数学の授業に疲れた私は、片肘をつき左前に座るゆきなの白いうなじを見るともなく眺めていた。すると突然、体の中で何かがうまれたような感じがした。最初は微かなうずきのような感覚だった。しかしそれは次第に大きく、そして重たくなつて、私の中に地響きのような震えを呼び起こした。それは何かを決定的に変えてしまった。私はユキナに恋をしていた。その発見は私を驚愕させ、体の芯を揺さぶつた。ひんやりとした汗が体中から噴きだし、対照的に顔が熱くなるのがわかつた。でも気付いた瞬間の衝撃が過ぎ去つてしまつと、後には事実だけが晴天にぽかりと浮かぶ孤陋の雲のように残つた。

ユキナは姿勢のよい女の子だつた。歩いているときも座つているときも背筋はぴんと伸びていた。彼女の頭はまるで空に浮かぶ星を指し示すかのように、天に向かつていつも固定されていた。色白の顔には大きな1対の漆黒の目がぽつかりと浮かんでいた。彼女と向かい合つて話をしていると全てを見透かされているように感じるこどがあつた。その視線は私が見につけている装備の全てを一瞬にして剥ぎ取つてしまふ力を持つていた。

ユキナと私は友達として高校生活を過ごした。私は彼女への恋心を心の一番奥深くにしまいこみ、細心の注意を払いながらユキナを思い続けた。2年生になつた時のクラス替えで別々のクラスになつてしまつまでの毎日、私は暇をみつけては彼女のうなじを飽きもせずに眺めていた。それは私をとても幸せな気分にしてくれた。冬になる頃には彼女のうなじを見るだけで多くがわかるようになつていった。彼女のうなじは彼女の体調や機嫌を実際に正確に私に語りかけてきた。2年になつてクラスが離れてからも私たちは仲のよい友人であり続けた。

私は自分が同性愛者であることを恥ずかしいと思ったことはない。私はどこまで行つても女性に恋をし続けるだろうし、男性に対して

性的な欲求を抱くことは決してないだろう。だからといって、私は自分の特殊性に関してオープンなわけではない。むしろ逆といってもいいくらいだ。私は頑なに自分の秘密を押し隠してきた。母親にも言つていらない。父親は私が中学生の時に交通事故で死んでしまったので、打ち明けるチャンスすらなかつた。父が生きていたからといつて状況が変わるものではないと思うが、女手一つで育ててくれた母親にむかつて「私は同性愛者だから、結婚することも、子供を生むこともないと思うわ。残念だけど」なんて口にすることはできない。絶対にできない。

私の秘密を知る人物が一人だけいる。彼女の名前はナオコという。私たちは同じ高校に通つていた。クラスも部活も違つっていたので、学校での接点は全くといつていいほどなかつたが、犬の散歩中に偶然公園で出会わせ、それがきっかけで仲良くなつた。学校でも話すようになり、犬の散歩にも一緒に出かけた。彼女はヨークシャー・テリーを、私はコリーを連れて公園で待ち合わせをし、井戸端会議でもするかのように最新の噂話などを三十分程話すのが私たちの日課になつた。

ナオコは小柄で活発な子だつた。そして何よりも幸せそうな子だつた。彼女はよく笑つた。その笑顔は、何か幸運な出来事を予言しているようにみえた。彼女の黒髪はいつも櫛をいれたばかりのように輝いていて、肩に届くか届かないかというところで、絶妙な曲線を描いて内側にカールしていた。それは達人が最高級の墨汁と筆を使って書き上げた、カタカナの「ノ」のように見えた。彼女と公園で過ごす時間は私にとってかけがえのないものになつていつた。他の何かで置きかえることはできない時間。それはナオコにとつても同じであつたはずだ。私にはそれがわかつていた。私は彼女を必要としていたし、彼女は私を必要としていた。だからといって私はナオコに恋をしていたわけでは決してない。私はあくまでも密かにユキナを想い、あくまでも静かに彼女のうなじを眺めていた。そして私とナオコはあくまでも友人であつて、その線を越えることは私の

望むところではなかつた。

私がナオコに秘密を打ち明けたのは高校2年の秋だつた。公園で初めて顔を合わせてから1年が過ぎよつとしていた。紅葉の季節は終わり、色合いが抜けた公園は冬を静かに待つだけといった様相で、空はといえば蓋をかぶせたような雲がこれから始まる北陸の冬を静かに、それでいて決定的に暗示していた。私は覚悟を決めていた。私は彼女に事実を、自分のありのままの姿を提示する義務があるし、ナオコはそれを知らなければいけない。いつもより長い時間をかけて公園に着いたとき、ナオコはいつもベンチに座つていた。

砂を踏みしめる足音がいつもよりも乾いている気がする。ステップに合わせて聞こえているはずの足音が、どこか遠くから聞こえてくる。ナオコはすぐに私に気付いて小さく笑う。私も小さく頷いて応じる。そして10センチほど間を開けて隣に座る。

言つしかない。

「今日は聞いてほしいことがあるの 」

私が話し終わるまでの間、ナオコは何も言わずに聞いていた。静かにまばたきをし、そして時々思い出したように小さく頷いた。それまで誰にも打ち明けたことがない事実。それは一旦私の口から発せられてしまうと他人事のようだ。次々と言葉が溢れてきた。どのくらい話していただろうか。布にインクが染み入るように、時間の感覚は意識の中に埋もれていった。十分かもしれないし、1時間かもしれない。途中で手袋を外したことを異様にはつきりと覚えていた。私は全てを話した。幾重にも包装された包みを剥がしていくよう。私は全てを話した。自分が同性しか愛せないという発見がいかに衝撃的な、しかし同時に自然な事実として私に訪れたのか。どれだけユキナのことを想つて毎日をすごしているのか。ユキナのうなじを眺めた幸せの日々についても包み隠さず

話した。私が全てを話し終わつたとき世界がひとまわり小さくなつた気がした。

しばらくの沈黙の後で、彼女は一つ大きく頷いた。そして口をしつかりと結んでから、もう一度強く頷いた。私の目からは涙が落ちていた。ナオコは私を受け入れてくれた。彼女は私を、この私をしつかりと抱きしめてくれた。ガラス細工を手のひらで包むように優しく私を抱きしめてくれた。一度あふれた涙はどどまることを知らなかつた。それまで自分一人の心で担いできた重荷。いつたいどれほどの荷物を背負つているかさえ知らなかつた。一旦荷物を下ろしてしまつと、それまで背負つて歩いていたものの重さが感じられる。背中は軽い。荷物はすでに地面の上だ。それでも、重さの不在を通して、軽さを通して、私はその重さを知ることができた。

ナオコに打ち明けたおかげで、私の気持ちはずいぶん楽になつた。もちろん打開策が見つかつたわけではない。状況は何一つ変わつてない。私はユキナに想いを打ち明けることはできないし、異性を好きになるわけでもない。それでも、ナオコが私を理解してくれているとと思うだけで心が軽くなつた気がした。

ナオコは私を受け入れてくれたんだ。

そこには抵抗もなく、嫌悪もなく、偏見もなかつた。

私、ひみつの続き

私の高校生活は概して充実していた。ユキナへの恋心は最後まで田の目を見る事ではなく不毛に終わつたが、ナオコという一生の友達を得ることができた。それに考えてみれば、初恋を実らせるのは誰にとっても簡単なことではない。ましてや私の場合はなおさらだろう。「初恋は叶わぬもの」という格言的なものまであり、時には科学的事実のような重みを伴つて語られることさえある。そこに同性しか愛せないという不利な条件が加われば、その格言の重さはなおさら際立つことだろう。

高校卒業後、私とナオコはそれぞれの道を選択した。私は富山に残ることに決め、ナオコは上京することを決めた。私はナオコに残つて欲しかつたし、ナオコは私が東京の大学へと進学することを望んでいた。公園のベンチに座つて長い話し合いを持つたこともあつた。私は穏やかではあるけれども執拗に互いの立場を説明した。しかしどれだけ話し合つた所で答えがでないのはわかりきついていた。それはどんな結論や妥協ももたらすことはなかつた。

「私は東京に行かなきやだめなの」とナオコは言った。彼女はその言葉を呪文のように繰り返した。「このままここにはいられない。自分の可能性を試してみたいのよ。東京に出て行つただけで何かが突然に変わる訳じやないのはわかつてゐる。もしかしたら何も変わらないかもしない。でも、オシャレな服をきて街を歩くのが目的で行きたいって言つてる訳じやないの。それはわかつてね。東京には未知の出会いと未知のチャンスが待つてゐる。私はそこに飛び込んで自分の目でその可能性を見てみたいの」

そして必ず最後に自分に言い聞かせるようにつけ加えた。「東京にいかなきやだめなの」

私にもナオコの熱を感じることはできた。正確に言えば、私も同じ気持ちを胸の内では共有していた。それは十代後半の地方に住む

高校生にとつてはいたつて健全かつ自然な感情だからだ。それでも口にはだせなかつた。言葉にしてしまうと自分を引き止めておけない気がしたから。私には私の責任がある。父親が死んでしまつてから、文字通り身を削るように私を育てくれた母を一人残して出で行くことは絶対にできなかつた。

「東京の大学に進んでもいいのよ」と母は私に何度か言つた。そしてその言葉は彼女の本心を語つていたのだろう。私にはそれがわかつっていた。それでも私にはできなかつた。それはもしかしたら母親のためではなく自分自身のためだつたのかもしれない。母親を独り残して上京することによつて生じるであろう罪悪感から身を守るために選択だつたのかもしれない。今になつても私には推測することしかできない。私の中にしか答えがないことはわかついても、それを決して見つけられない。自分に探すつもりがないのかもしれないし、巧妙に隠されているからかもしれない。それさえもわからない。一つだけ確実なのは、もう一度同じ選択に直面したとき私はやはり同じ決断を下す、ということだけだ。

大学生になつてからも、私とナオコは連絡をとりあつた。富山と東京。離れた場所ではあるが、今の時代電話だつてあるしメールだつてある。大航海時代に旅にでてしまつた友人と連絡をとるのとは訳が違う。昔、といつてもそれほど遠くない昔だが、電話がない時代の人々がどのように生きていけたのかが不思議でならない。ナオコと離れて連絡をとるようになつてから、私はますます強くそう感じた。電話がない時代。もちろん携帯なんてない時代。人々は手紙でしか連絡を取り合うことができなかつた。それは私にとっては暗黒時代のように思える。大袈裟かもしれないが本当にそう思えてしまう。映画でよくあるような闇が支配する時代だ。人々はその闇の世界で、窓のない地下牢獄にいられ、目隠しをされ、おまけに手錠までかけられている。そんな世界だ。しかし映画との決定的な違いは、その時代が遠からぬ過去に実際に存在していたということだ。

人々は実際にその時代を生き抜いていたのだ。とても信じられないけれど、本当に。

大学にも友達と呼べる人間はいた。食堂でランチと一緒に食べたり、講義のノートをみせあつたり、週末には買い物に出かけたりもした。それでも私は毎日のようにナオコに電話をかけた。どんなアルバイトをするべきだらうか、来学期の授業は何をとるべきだらうか。そんな感じだ。それらの相談内容は同じ大学に通う友人達にしたほうがはるかに話の早い類のものだつた。ナオコとは大学も違うので授業のカリキュラムも別だ。バイトにしても東京と富山ではずいぶんと事情が違つっていたはずだ。それにも関わらず、一から事情を説明する手間を踏んでまでナオコに相談することを私は好んだ。近くにいて毎日のように顔をあわせる友人達よりも、ナオコの方が私にとっては近い存在であり続けた。私は幸せだつた。もちろん当時は自覚することはなかつた。あくまで今振り返つてみれば、といふことだ。毎日はとてもスマーズにながれていた。まるで立山から流れる雪解け水のようだつた。母に愛され、私を理解してくれる友人がいた。そしてそれは太陽のように決して消えることはないようになされた。少なくともそう願つていた。

私は大学時代に、一人の男性と付き合つたことがある。タカシというのが彼の名だつた。それは2年生になつたばかりの春だつた。もちろん私は同性愛者で、男性を愛することはできない。その事実はどこまで行つても変わらない。でも、大学の友人たち私は秘密を知らなかつた。そして私は、自分でいうのも気が引けるが、わりと端正な顔立ちをしている。それにスタイルだつて悪くない。キャンパスを歩いていて男子生徒の視線を感じる時もある。普通の女性であれば、それは自分に自身がありすぎる故の勘違いだと言われても仕方がないだろう。ただ私に限つて言えばそれはあり得ないことだ。性的興味もない異性からの視線を頭の中で作り上げたりはしな

い。そんな事実は私にどんな優越感ももたらしてはくれない。友人は口を揃えて私が彼氏を作らない理由を聞きたがつた。彼女たちは事あるごとに男友達を私に紹介しようとした。どうして彼氏を作らないの、と彼女達は口を揃えて言った。彼女達がどうしてそこまで私に彼氏がいるかどうかを気にしなければいけなかつたのか全くわからない。でもとにかく何度も尋ねた。最初は適当にあしらつていた私も、やがて言い訳に窮するようになってしまった。どれだけ努力しても恋人ができる人がその言訳を見つけるのは簡単かもしれない。でも恋人を作らない理由を探すのはなかなか大変なことだ。ましてや心にない出任せを並べなければいけないとなると、それはなおのこと困難になる。そして私に男友達を勧めてくる彼女達の話を聞いていると、もしかしたら付き合つてもいいかもしない、という気持ちが私の中にも生まれてきた。もちろん本気で愛することはできなければ、付き合つことくらいならできるかもしない。それに彼氏がいるという事実は、登山者がクマ避けにぶら下げる鈴のように、煩雑な会話を私から遠ざけてくれるかもしない。高校以来、私には好きな人がいないというのも大きな理由の一つだけれど。

ナオコも私の意見に賛成してくれた。といつか、私の意見を尊重してくれた。彼女が私の意見に反対することはめつたにない。彼女はいつでも私の話をじっくりと聞いてくれる。話の筋を折るようなことは決してせずに、耳を傾けてくれる。最低限の質問を的確にし、話の続きを促してくれる。無駄な動きは一切しない有能な指揮者のように。

ナオコと話していると不思議な感覚を覚えることがある。彼女に向かつて話しているのか、私自身に向かつて話しているのかわからなくなってしまうのだ。

タカシを紹介してくれたのはミキだった。彼女とは英語のクラスが一緒に、クラス内のグループワークがきっかけで仲良くなつた。

PHSにアニメのキャラクター やぬいぐるみをこれでもかというくらいぶら下げるが、とても落ち着いた口調で話す女の子だった。私が相談を持ちかけるとミキは快諾してくれた。いい人がいるわ、と言つて重たそうな携帯をバッグから引っぱりだして電話をかけた。その翌日にミキとミキの彼氏、その彼のバイト先の先輩であるタカシと私の4人で飲みに行くことになった。

タカシはすらりと身長が高くて、とても優しい顔をした男性だつた。春らしい薄手のジャケットがとてもよく似合つていた。変に馴れ馴れしい態度もなく、初対面にふさわしい適度な距離感を持つた話し方にも好感を抱くことができた。最初の自己紹介が終わつてしまふと、寛いだ雰囲気で時間を楽しんだ。私は別れ際にタカシから連絡先を聞かれたときに、素直に電話番号を書いた紙を手渡した。それから私達は週末と一緒に過ごすようになつた。たいていは、タカシが水曜か木曜の夜に電話をかけてきて私を週末のデートに誘つた。最初のデートは映画だつた。その次の週は砺波のチューーリップ畠までドライブをした。そんな生活が一ヶ月ほど続いた。

私はタカシと時間を過ごす週末を待ち遠しく思うようになつていった。彼との会話は楽しかつたし、彼は私を笑わせてくれた。一緒にいるところ落ち着いた気分になれた。それでも私は恋愛対象、つまりは性的対象としてタカシを見ることはできなかつた。もし私が男性を好きになることができて、タカシのような人と一緒に過ごせたらどんなに素晴らしいことだろう、と私は思つた。本当にそう思つていた。幸せな人生を歩めるのかな、と思い巡らせた。彼を恋愛対象として考えるよう努力した。自分を納得させようとした。でも全ては無駄だつた。結局のところ、私が愛せるのは同性だけなのだ。それは私の生来の性質であつて、私という人間を構成する要素の中心にどっしどと腰を据えている。どれだけ強く押してみても動かすことはできない。

出会いから2ヶ月がたち、タカシが私達の関係を一步進めようとしているのがわかつた。私もできることなら、タカシに抱かれた

いと思つた。そして思いつきり幸せをかみしめたいと願つた。でもそれは私にはできることだった。私の体はタカシを求めてはいな。私は次第にタカシに対して一種の罪悪感を抱くようになつた。私は彼の時間もてあそんでいるだけなのかもしれない。でも同時に、彼に別れを告げる勇気は私にはなかつた。彼は私の心の決して小さくない部分を占めていたからだ。

でもいつまでも曖昧なままでいることはできなかつた。最初の飲み会から5ヶ月がたとうとしていたその日、私たちは車で金沢まで買い物に行つた。富山はないブランドを扱うお店もあり、私は2ヶ月に1度は金沢に出かけていた。

10月になり、僅かに残つていた夏の気配を秋が完全に覆い隠そうとしていた。街の色が一段薄くなり、季節は確実に移行していた。通りを歩く人々は黒や灰色といった服をまとい、ブーツ姿の女性もいた。

私達が富山に戻ってきたのは夕方の6時くらいだつた。高速をおりてすぐ近くのマレーシア料理屋で食事をすませた。いつもならそのまま私のアパートまで送つてくれるタカシが、私を彼のアパートへと誘つた。車のエンジンをかけてから、彼は私に向きかえつて言った。「今日はおれのアパートに泊まっていかないか?」

断ることはできなかつた。いやとは言えなかつた。もしかしたらアルコールが入つていたのもあるかもしない。何とかなるような気もした。いざとなれば、できる気がしたのだ。少なくとも、試してみてもいいと思つた。

私は小さく頷いた。

彼のアパートへと向かう車の中は静かだつた。それぞれがそれぞれの期待と不安に耽つていた。叩けば砕けて割れてしまいそうな緊張が車の中に漂つっていた。彼も緊張していたし、私も緊張していた。それもかなりだ。私は、できるできるできる、と呪文のように心の中で繰り返した。大丈夫、大丈夫、大丈夫。

アパートに入つてすぐに彼が後ろから抱きついてきた。彼の息が首筋にかかる。彼の興奮が背中越しに伝わってくる。そしてそのままの勢いでベッドに押し倒された。彼は私を仰向けにし、それから私の唇にキスをする。今までにない激しいキスだ。彼の手が探るよううに私のTシャツの中に入れられる。最初は慎重に様子を窺うように。それから強引に。でも、私には何も感じることはできない。私はただそこについて、与えられるものを受け流すことしかできない。それは、私をこれまでにないくらい悲しい気持ちにさせた。ひどく孤独にさせた。気が付くと私はタカシの手を払いのけていた。

「ダメ、やっぱりできない」戸惑うタカシに向かって私は言つた。
「ダメって、何がダメだつていうの」タカシは動搖した声で尋ねた。
「できない」私は同じ言葉を繰り返した。

「できない……」彼は私の言葉をなぞるよつて言つた。「おれの事が嫌いなの？」

「嫌いなわけじゃないの……でもダメなの。ごめんなさい」それだけ言つてしまつと、何か言おうとしているタカシを残して私は逃げるよつて部屋を出た。

それから一週間、毎日のようにタカシから着信があつたが、私は電話に答えなかつた。できることなら、彼と一緒にいたい。楽しい週末を過ごしたい。でもそれはやはり叶わぬことなんだ。目的地のない船に乗り込むことはできない。私にとつても、彼にとつても何もよい結果はもたらしてくれない。

やがて携帯はならなくなつた。それは沈黙だけが取り柄の重石のよつて、静かに私のバッグに入れられていた。

僕、完璧なコーヒーが舌に残す渋み

僕とその女性は窓際に席をとった。彼女はメニューをしばらく眺めたあとでブレンドコーヒーを注文した。僕も同じ物を頼んだ。顔見知りのオーナーがにやついていたが、僕は気付かないふりをした。いつもであれば僕も自慢げに微笑み返していたと思う。でも今はとてもそんな気分にはなれない。

「喫茶オオタニ」というのが喫茶店の名前だ。オオタニはオーナーの名前から取っている。僕は閉店後や休日を頻繁にこの喫茶店で過ごした。店内にはいつでも心地よい音楽が心地よい音量で流れている。読書や会話の邪魔は決してしない音量だ。だからといって話が店内に行き届くことを心配させるでもない。フランス人シェフがデリケートなソースを作るのに似ている。どこまでも計算されていて隙がない。一見気取らないが、裏には確かな技術が存在している。最近では、最適な音量で良質な音楽を流している喫茶店が少なくなってしまった。店内には茶色の革張りソファが置かれている。それは回りの空間さへも過去へとひっぱつていける重たい存在感を持っている。歴史を刻んだものだけがもつことのできる種類のものだ。革は色が褪せて落ち着きを放っていた。そして赤や黒のしみが数箇所に勲章のようにこびりついていた。そして何よりも僕がこの場所を気に入っている理由は、いつもお客が2、3人しかいないことだ。喫茶店には最適な音量と同様に最適な客数が存在していると僕は考える。満席では落ち着けないし、誰もいなくても落ち着けない。2、3人という客の数はまさに理想的だ。

コーヒーが運ばれてくるまで僕たちは黙っていた。彼女はずつと下を向いて、鞄の紐を人差し指でいじつっていた。

彼女はコーヒーを口に運んで、カップをそっとソーサーに戻した。

「おいしいでしょ？僕このコーヒーがすごく好きなんです」と僕は言った。

「ええ、とつても」

「休みの日もここにきて読書をするんですよ。すぐ落ち着けて集中力も高まるようなきがして」

彼女の口元が小さく動いただけで言葉が帰つてくることはなかつた。僕は気を取り直して続けた。「オーナーとも結構古い付き合いなんです。なんせ僕の店とも近いですから…」

「今日は突然ごめんなさい」と彼女は僕の言葉を遮つて言った。小さな声だったが、そこには確かに氣概が窺えた。「どうしてもこの子を手放さなくちゃいけなくなつてしまつたんです。でも頼れる人なんて誰もいなくて。野放しにしていくのだけは嫌だと思っていたら、ちょうどピット・ショップの看板が目にはいつたんです。ご迷惑をかけてしまうのはわかっています。でも、何とかお願ひできませんか?」

僕は少し考えてから言った。「名前は?」

彼女は少しだけ戸惑つた表情を見せたが僕の質問に答えた。犬の名前はコリー。飼い始めてから2年になるらしい。

「で、どうして手放さなきやいけなくなつてしまつたんですか?」

彼女の指先は鞄の紐を触り続けている。人差し指に巻きつけては、それをほどいている。「コリーがかわいそうだから…」囁くような声で彼女が言った。

そう言つてしまつと彼女は少し疲れた表情を見せてから視線を落とした。テーブル上には彼女にしか見えない架空の一点が定められているようだ。僕と彼女の間のテーブルには、彼女にしか見えない模様でも浮かび上がつているかのようだ。そこに思考が介在する余地を見て取ることは出来なかつた。心はどこか別のところに放たれたまま、肉体だけがさまよつているように見える。そんな彼女の表情は僕に1人の女性を思い出させた。僕が初めて真剣に付き合つた女性だ。大学卒業が間近にせまつていた冬に、僕たちは出会つた。彼女はとてもすてきな女性だつた。そして控えめにいつてかなり端整な顔立ちをしていた。僕ら2人が歩いていると、すれ違う男たち

は必ずといっていいほど彼女に目を奪われた。そして、大方の場合には小声でのひそひそ話があとに続く。もちろん彼らの声は聞こえない。でも予想は容易だ。なんであいつがあんなにきれいな女性を連れて歩いているんだ？表現に多少のバラエティはあったとしても、要はこういうことだ。僕は別に特段ひどい容姿をしているわけではない。皆が振り向くほどのいい男ではないが平均以上の自信はある。比較的小奇麗だとも思う。今も昔もシャツはいつもアイロンをかけた張りのあるものを着ているし、髪だって短くて清潔感がある。それでも彼女の隣を歩いていると僕は世界で一番醜い男になってしまったかのように感じられた。まるで美女と野獣だ。

僕は彼女の息を呑むほどの容姿に惹かれていた。特に彼女が怒ったときの表情は呼吸を忘れてしまった。もしかしたら表情といつ言葉は当てはまらないのかもしれない。僕が惹かれたのは、彼女の無表情だったからだ。口づぐんでつんとした彼女のそんな表情が大好きだった。

「最近横浜に行きました？」

僕の質問に彼女は目を少し開いて驚いたような表情を見せたが、いいえ、と答えた。

「もしよかつたら今度の日曜日一緒にどうですか？もちろんコリーも一緒に。」と僕は言った。それから付け加えるように続けた。「お店として買取ることはできません。でも、僕が個人的に引き受けたあげることはできるかもしね。ただ、無責任に二つ返事はできません。人間同士に相性があるように、犬と人間にだって相性があるからです。返事をする前に、少なくともコリーがどんな犬なのかも知りたいんです。それが僕にとって最適だし、コリーにとって、そしてあなたにとっても安心できる方法だと思います」

彼女はしばらく無表情に先ほどと同じテーブルの上の一点を見て、やがて顔をあげて、わかりました、と言った。「じゃあ今度の日曜日、10時にお店の前にきます」

それから彼女は静かに席をたつて、コリーを連れて喫茶店を出て

行つた。犬は相変らず小さく震えていた。

僕は自分の言葉を頭の中で繰り返してみた。そして少し後悔した。犬を口実に、デートに誘つただけだと思われたのだろうか？彼女が追い込まれていてる状況を利用したように見えただろうか？そう考えるに顔が熱くなつた。それでも、他に何か選択肢があつたかを考えてみたところで何も思いつかなかつた。仮に、彼女は何らかの形で精神的に追い詰められているのだとしよう。僕が断れば彼女に残される選択の幅は限りなく狭まってしまう。僕は自分にそう言い聞かせた。僕は正しいことをしているはずだ。僕はカップの底に残っていたコーヒーを飲みほした。それは微かな苦味を舌に残していった。

私、仕事についての考察

卒業後に私は富山での就職を決めた。自宅から車で15分の距離にある花屋だ。

子供の頃よく母に連れられていったスーパーの中にその花屋はある。店先にはいつでも色彩豊かな花が飾られていた。店先から5メートルほど離れて店頭ディスプレイを眺めるのが私の一番のお気に入りだった。まるで展示物が毎日変わる美術館を訪れているようだった。花の配置は私が訪れるたびに変わっていて、母が買い物をする間に、その景色を眺めるのが幼い私の日課だった。高校になる頃には、私はすでに花屋で働くことを胸の内に決めていた。だからといって可憐なイメージだけで決めたわけじゃない。何より私を惹きつけたのは、花が人に与える影響の強さだ。花の色と種類によって作り出される花束は、人をとても幸せな気持ちにさせることができる。それはアレンジする人の気持ちや意図を見事なまでに反映し、見るものの心を強く動かす力を持っている。

大学時代に私はフラワーアレンジメントに関する本を読みあさつた。夏期休暇を利用してフラワーアレンジメント教室に熱心に通いもした。そのかいあって、大学卒業間近の私には莫大な知識が蓄積されていた。私は慣れ親しんだ花屋の店長であるヨリエさんに、彼女のお店で働きたいと勇んで伝えた。ヨリエさんは考える様子もなく、いいわよと言ってくれた。

彼女は毎日お店の前で花を眺めていた少女を覚えていてくれた。いつか必ず花屋で働くだろうなって思つてたのよ、と彼女は笑みを浮かべて言った。「すごく楽しそうにディスプレイを見てたのを今でも覚えてる。じつが緊張しちゃうくらい一生懸命にね。あなたは知らないだろうけど、フレッシュヤーだったんだから。あの子の期待を裏切らないようなアレンジをしなきやつていつも思つてたのよ」そう言つたヨリエさんは、私が覚えているよりもいくぶん落ち着いて

て見えた。記憶の中の彼女は、ピンク色のエプロンが似合うお姉さんだつた。若さという有り余るエネルギーを周囲に放っていた。でも目の前にいる彼女にそれはない。外見が老けてしまった訳ではない。30代前半であろう彼女の体型は以前と変わらずにスリムなままだ。顔も髪型以外に変化は認められない。それでも4年の歳月は目に見えないものを見るには十分なのかもしない。若い私にとって時は常に私の味方をしてくれるのだ。それは何かを与えてくれるものであり、私から何かを奪うことは決してない。でもそれが永遠に続くことはないのだ。それはわかっている。ある時点で転換点は確実に、そしておそらくは唐突に、訪れる。後戻りはできない境界線。完全なる一方通行。その地点を越えてしまえば、時は手の平を返したように私達から多くのものを奪い始める。

就職が決まったその夜、私はナオコに電話をかけた。彼女は私の就職を心から喜んでくれた。彼女は私が花屋の前で過ごした日々を知っていたし、私がどれほど狂信的なまでにフラワーアレンジメントを勉強していたかを知っていた。

「ユイは最高の花屋さんになれるよ」と彼女は電話口で声を高めた。「それだけ花が好きなんだから、まさに天職だよね。私も無事に貿易会社に就職が決まってるし、これで2人は安泰だね」

私たちはそれぞれ冷蔵庫から冷えた缶ビールを出して、電話越しに乾杯をした。

「2人の未来に」

花屋での仕事は楽しかった。アレンジして販売するだけが仕事じゃないのは始からわかつていたので、理想と現実の差に落胆することもなかつた。私が大学時代に読んだ本の中には、花屋の業務内容に関するものが多く含まれていたからだ。日々はおおむね私の期待通りに流れ、充実した生活を送ることができた。ただ慌しく過ぎていつた1年目と違い、2年目になると顔なじみのお客が増え、その中の何人かは私のアレンジをとても気に入ってくれた。彼女達は、

何か入り用があるたびに、私にそれに見合ったアレンジを依頼した。私は彼女達のイメージをできるだけ損なわないよう、念入りに話を聞いた。どのような場面で、誰に渡すのか。そしてどのような気持ちで送るのか。それらのリクエストを私の中で消化し、そしてアレンジ案を膨らませた。

そして7年がたつた今では、私は店長となって毎日を忙しく送っている。

とても充実した毎日だ。

僕、偉大な芸術家の寂しい最期ー（前）

それからの2日間を僕は落ち着かない気持ちで過ごした。もしかしたら今にも彼女がきて、「やっぱり日曜はやめます。犬は他をあたってみます」と言うかもしれない。いや、もしかしたら彼女は2度と姿を見せないかもしれない。そんなことを考えながら僕はドアを眺めて1日を送った。結局その日はドアが開かれる事はなかつた。彼女だけではなく、誰も店に来ることはなかつた。無理もない。12月の寒空の中、しかも平日に誰がペットショップになんて立ち寄るだろ？世の中の人たちはそれほどまでに時間を持て余してはないはずだ。僕は新聞を広げながら、10分に1度は、そして閉店間際には5分に1度は顔をあげて店内を見回し、それからまた新聞に目を落とした。

日曜日は前日までのことを忘れてしまったように晴れあがつていた。鳥も空の少し高いところを飛んでいる気がした。僕は少し早目に家を出て、「オオタニ」でモーニングセツトを食べた。それから店に向かい、ドアに「本日休業」のはり紙をした。店内を回つてエサを取り替えてしまうと、他にすることもなかつたので新聞を読んだ。

約束の時間になつても彼女はやつてこなかつた。10分が30分になり、30分が1時間となつた。彼女は他の誰かに犬を任せることにしたのだろうか。だとすれば彼女が今日ここに来る理由はない。その考えは、僕が思つていた以上に僕を落胆させた。自分でも驚くほどに。

今からでも店を開けることはできる。ドアに下げた本日休業のサインを裏返せばそれで終わりだ。それだけで僕は「営業中」となる。少しだけ考えたあとで、その考えを振り払つた。そもそも休もうと思つていたからか、どうしても開店する気にはなれない。それにどうせ誰もこないんだ。

僕はもう一度「オオタニ」に行くことにした。おいしいコーヒーと落ち着ける場所が必要に思えた。新聞だけを手に僕は店を出た。

僕には探しているものがある。正確には、探している人だ。それも、ただの人ではない。

6ヶ月前の今日、6月15日に僕の彼女はいなくなってしまった。僕たちが出会ってからちょうど5年目だった。ちょうど、ぴったり5年。「いなくなつた」という表現は多くの可能性を内包している表現だろう。そこには意識的、無意識的に関わらず曖昧さが介在している。でもそれ以外の言葉を見つけるのは至難の業だ。そこには一定の曖昧さが必要とされている。なぜなら、彼女の「失踪」が、自己の判断でなされたものなのか、それとも、そこには何かしらの外的な力の関与があつたのかがわかつていなかからだ。一つだけわかっているのは彼女はもういないという事実だけだ。

僕と彼女は遠距離恋愛をしていた。彼女が住んでいたのはスペインのバルセロナだ。3年前の7月、スペインの偉大な建築家アントニオ・ガウディの作品群に魅せられた彼女は繁殖期のネコのようなくして日本を発つていった。それ以降、彼女はガウディが残した建築物を描き続けた。バルセロナの街にはガウディの作品が散りばめられていて、それは宝石のような輝きをもつて街を彩り飾つている。ヨーロッパの中でも前衛的なバルセロナの街。ガウディが建築という形式を通してバルセロナというキャンパスに描き出した独特な曲線は異様なまでの存在感を放つており、そして美しい。

彼女は未完の大作サグラダ・ファミリアをスケッチブックに描き綴つた。

硬さの違う数種類の鉛筆だけを使って彼女はスケッチを続けた。彼女はくる日もくる日も描いた。朝はとても早く出かけた。鉛筆とスケッチブックの収まつたショルダーバッグと簡単な折りたたみ式

イスだけが彼女の持ち物だつた。そして所定の位置に陣をとる。サグラダ・ファミリアの全景を望める絶好のスポットだ。スペイン到着後の3ヶ月間を費やし探し当てた。途方もない距離を歩いた。自分が三蔵法師か何かになったような気がしたわ、と彼女は僕に向かつて言つた。もう歩けないわ、と。しかし、それを語る彼女の声は秘宝を見つけた海賊を僕に思い起こさせた。

一年がたとうとしていた頃、彼女はちょっととした話題になつた。毎日サグラダ・ファミリアだけを熱心に描くアジア人が地元メディアの関心をひき、ニュースで紹介されたのがきっかけだつた。僕は直接その特集を見たことはない。放送の翌日、彼女が嬉しそうに僕に電話で報告してくれた。彼女の声は、まるで彼女が隣の部屋にいるかのようにクリアに聞こえた。タイムラグもなにもない。雑音がないわけでもない。国際電話だと気付かせるような要素は存在しない。録画したテープを送るね、と彼女は言つた。しかし日常の雑事の中に紛れてしまつたのだろう、結局それが届くことはなかつた。

アントニオ・ガウディイはその生涯を通して数多くの建築をバルセロナの街に残した。どれも当時の既存の建築物からは一線を画するような奇異な外觀を備えていた。彼は自然を常に開かれている本と考え、自らの建築デザインに取り入れていつた。木々の根が持つうねりの曲線。垂れる枝が描く優雅な曲線。自然を師と仰ぐ彼は自らの建築をもつてバルセロナの街に見事な曲線を描いていつた。

ガウディイの人生は彼の作品同様に風変わりなものであつた。幼い頃は病弱な体質に苦しめられたガウディイは、大人になつてからは億劫な性格に悩まされ女性恐怖症となつてしまつ。同じく病弱だった兄弟たちとも死別をしたため、彼は孤独な人生を送ることになつた。それはもしかしたら幸運なことだつたのかもしれない、と僕は思う。芸術家は生来孤独でなければいけない。結局のところ、芸術とは自身の内面を描く物だからだ。誰かの写しではなく真にオリジナルの物を生み出そうとした場合、人は自身の内に向かうしかない。外的

影響を受けずに守られていて自分の核のような部分に降りていかなければいけない。そしてそこから何かを掬い上げてこなければいけない。そうすることで初めて生まれたての赤ん坊のような純粋で独創的な芸術が生み出される。

建築に捧げたガウディーの人生の終わりは唐突に訪れた。彼は仕事場であるサグラダ・ファミリアに向かう途中で路面電車に引かれて死んでしまう。

偉大な芸術家の寂しい最期だ。

僕、偉大な芸術家の寂しい最期ー（後）

僕の彼女の失踪に關してはかなり大規模な捜索活動が行われた。日本大使館の協力に加えて、現地警察も全面的に協力してくれた。彼女が地元で名物的な絵描きとして名を知られていたこともあり、犯罪に巻き込まれた可能性にも捜査の目は向けられた。彼らは周辺に連なるお土産屋のオーナーや、通りに並ぶ似顔絵家、そして地元住民への聞き込みを行つた。その途中経過は被害者家族、つまりは彼女の家族を通して僕にも知らされた。日本大使館の職員も現地の日本人に連絡をとり彼女と交流のあつた人物を探した。何らかの情報が得られれば、と尽力してくれた。それでも手がかりが見つかることはなかつた。もちろん彼女の住んでいたアパートの捜索も行われた。僕も3度行つたことがあるアパートだ。争つた形跡はなく、何かが盗まれている様子もなかつた。クローゼットには3日分ほどの服がおさまるくらいのスペースが孤独なクレーターのように残されていた。

彼女の家族にも、そして僕にも、彼女が自ら姿を消してしまうような原因是思い当たらなかつた。失踪の直前まで彼女はいつも通り電話をくれた。話す内容にも特に変化は無かつた。おいしいベーカリーを見つけた。漢字を少し忘れてきてている気がする。次はいつスペインに来てくれるの？そんな感じだ。

事件性を示す証拠がなかつたにも関わらず、地元警察はずいぶん丹念な捜査を行つてくれた。しかし彼女は見つからなかつた。そして4ヶ月で特別捜査は打ち切られた。もちろん捜索は今も継続している。動因される警察官の数が減つたのは事実だが、少なくとも誰かが彼女を捜索しているという事実は彼女の両親や僕を安心させた。

僕はとても混乱している。まるでピースが足りないジグゾーパズルに取りかかっているようだ。どこかしかるべき場所にピースは隠

されている。いや、隠されているはずだ。そう望んでいる。そうじやなければ余りにもひどすぎる。

状況がつかみきれない。わからないことが多すぎる。必要な情報が決定的に不足している。どうして彼女はいなくなればならないんだろう？いつたい何があつたんだろう？この6ヶ月間、僕は考え続けた。いくつかの仮定もたててみた。でももちろん答えはでなかつた。それは彼女しか知らないことだからだ。

彼女がいないうことが何を意味するのか未だにわからない。その事実はあまりに巨大すぎて、僕の視界からはみ出してしまつていて。使い捨てカメラを使って、エンパイアステートビルディングの全景を収めようと苦闘しているようなものだ。そもそも彼女がいることが僕にとって何を意味していたのだろう。僕は彼女を愛していた。それは間違いのことだ。自分のことのように、もしかしたら自分が僕にとって何を意味していたのだろう。彼女の話であれば何時間でも聞くことができた。インターネット電話が普及してから分のこと以上に、彼女の身の上を心配していた。彼女の話であれば何時間でも聞くことができた。パソコンの前で費やすことも珍しくはなかつた。それでも時間をもつたないと思ったことなんて一度もなかつた。僕は彼女と寝るのが大好きだつた。つきあつてから5年がたつても、彼女に対する性的な興奮が衰えることはなかつた。彼女に出会つてから5年、僕は彼女以外の誰とも寝たことはないし、その可能性を考慮したことさえもなかつた。僕が知る限りにおいて、そしてそれはかなり的を射ていると確信しているが、彼女にとっても同じことが言えたはずだ。

僕が「オオタニ」に行こうと店の扉を開けると、そこにはコリーが小さく座つていた。辺りを見回しても、そこに彼女の姿はなかつた。

僕は小さく溜息をついた。

「リーが何か言つた気がしたが、そんなはずはない。
僕はもう一度溜息をついた。

私、人は何かを失うために生きている？

宇宙は、つまり私達が定義する世界は、ビッグバンから始まつたとされている。少なくとも今のところは。

全てが完璧な、無限な特異点から宇宙は始まつた。そしてその瞬間から私達が知る世界が始まつた。時間は方向性を持つて私達が未来と呼ぶ一方に向かつて流れ始めた。完璧な秩序から生まれた宇宙は無秩序に向かつて進む。時間の経過と共に秩序あるものは、その秩序を失う。ジグゾーパズルを思い浮かべて欲しい。完成したジグゾーパズルを箱に入れて振る。振れば振るほどにパズルのピースはばらばらになつていく。それと同じだ。

大学時代に読んだ宇宙物理学の本に書いてあつた。ステイーブン・ホーキングスの講義をまとめたものだつたはずだ。今でも本棚の奥に眠つている。本の大半は原語で読んだせいもあつて何が書かれているかを理解することはできなかつた。でも、この一部だけは私は鮮明な印象を残した。難しい言葉を使って説明されていたため何度も読み返さなくてはいけなかつたし、どうしても理解できない箇所は論理的な説明を勝手に頭の中で加えて空白を埋めた。

当時、私はこの考え方を気に入つたし、今でも気に入つていて。考えれば考えるほどに軽い立ちくらみのような不思議な感覚に襲われる。それがどこから生まれるものなのかはわからない。自分が立つて居る足場が実は宙に浮いていたと知らされるようなそんな感覚だ。それは宇宙の法則というよりは哲学のように聞こえる。完璧な秩序が進むべき方向は1つしかない。完成したパズルはばらばらになる時を待ち、ワイングラスは割れる時を待つて居る。

母の病気を知られたのはちょうど一年前のことだつた。
私はいつもどおり仕事を終えて帰宅をした。母は台所で夕食の準備

備をしていた。母のほうが仕事が早く終わるため、食事の準備は彼女がすることになっている。皿洗いが私の担当だった。彼女は私が帰ってきたのを見ると、あと15分くらいで準備ができるから先にシャワーしてきていいわよ、と言った。

花屋での仕事はかわいらしい印象とは裏腹に意外と体力を使う。店先にたつて、微笑みながら花を売るだけが私たちの仕事じゃない。

私がシャワーから出ると、テーブルには夕食が並んでいた。大根の千切りと水菜のサラダに、豚肉を甘酢で炒めたもの。それに、ジヤガイモの煮物。もちろんご飯と味噌汁もある。私の母はどんなに疲れていても食事の準備に手を抜いたりはしない。健康的な食事なしに健康的な人生はない、というのが彼女の口癖だった。それともう一つ。ご飯中にテレビは見ない。これが、母が私に口をすっぱくして言い続けたルールだ。我が家では唯一のルールと言つてもいい。勉強を強要されたことも、友達と遊びに行くことを制限されることもない。ただ、食事中にテレビをつけることだけは決して許されなかつた。そこにはどんな例外もなかつた。今から考えてみると、それは母にとっては、そして私にとっても必要な決まりだつたのだろう。父親がいない私を育てるために、許す限りの時間を働いてすぐしてきた母にとって、2人が夕食を食べる食卓こそが唯一の意思疎通の場であったからだ。そしてその習慣は私が働き始めてから6年が経つても変わることはなかつた。なにより私もその時間をとても貴重なものと考えていたからだ。

その日の夕食が終わって、ビスケットをかじりながらお茶を飲んでいるときに母が思い出したようにいった。「ねえ、お母さんガンみたい」

母の言い方があまりにも緊張感のないものだつたため、私は耳にした言葉とそれが示唆する事実とを上手く結びつけることができなかつた。自宅が炎上する様子を呆然と眺める一家の長のような気持ちで、私は母の顔を何も言わずに見つめた。

母も私の顔を見返していた。次第に私の頭の中に母の言葉が染み

入つてくるのがわかつた。私の脳が母の言葉を処理する。私がその意味を理解する。そしてその事実は深海に向かつて限りなく沈む碇のうに私の胸を引っぱつた。聞かなきやいけないことがたくさんある。気になることがたくさんある。でも言葉はその形を見つける前に、再び私の心へと引き戻された。

私は泣いた。激しく泣いた。嗚咽をあげて泣いた。何も考えることはできなかつた。そこには悲しみがあり、いかなる感情や論理の介在も許されなかつた。母のために泣いていたのか、私自身のために泣いていたのかわからぬ。ただ涙は流れ、私の服を濡らした。しばらくたつて母の手が私の手を優しく包んだ。そつと置かれた彼女の両手はとても温かかつた。そこには確かに命の証があつた。今まで私を守つてくれた手だ。ときによく、ときに静かに、愛情を持つて私をいかなる危険からも遠ざけてくれた手。それがない世界なんて想像できない。私自身の心がもぎとられるようなものだ。母は静かに言つた。「今日再検査の結果がでてわかつたの…確かにだつてわかるまで、ユイには言わないでおこつて決めてたの。心配かけたくなかったからね」母は一言一言の重みを秤で量るようにゆっくりと話した。「かなり広がつてしまつてゐみたいで、手のうちようがないみたい」

彼女は小さく息を吸い、気持ちを落ち着かせるうつな仕草をしてから言つた。「あと1年らしいの」

枯れたと思った涙が再び私の目に溢れた。母も泣いていた。私は床に座り込み、お互ひを強く抱きしめて泣き続けた。

女、沈殿した意識のなかで聞こえる重たい声

女が部屋の鍵を開けるのを待っていたかのように電話が鳴り始めた。母親に違いない。自宅の電話にかけてくるのは彼女くらいなのだ。急いで靴を脱ぎ、リビングで受話器をとると、母親がもしもしなく言つた。「あら、今日はいるのね」。

「いないと思うなら携帯にかけてよね」、鍵をテーブルの所定の位置に置きながら女は答えた。「出かけてても連絡がとれるように携帯電話があるんだから」

「そうね、覚えておくわ」と母親は言つた。が、それが全くのまかせであることを女は知つてはいる。彼女と母親の間でいくどなく繰り返されてきたやりとりだ。テープに答えを録音しておいて、やりとりが始まつたら流そうかと冗談交じりに考えたこともあるくらいだ。でも結局はより現実的な方法に落ち着いた。女は留守電のメッセージを変えたのだ。ただいま留守にしています、御用の方は携帯まで連絡下さい。それはもちろん母親にのみ向けられたメッセージだつた。母親以外の誰一人として自宅の電話に連絡なんてしてこない。それでも母親から携帯に電話がかかつたことは、ない。ただの一度も。

母はそれからじばらぐの間、父や職場について話した。父のいびきがうるさくて眠れない、最近手がかさつく、パートの待遇が正社員と違いすぎる。どれも控えめに言つて一度以上は聞いたことのある話だ。女に求められているのは、受話器を耳に当て、母が息継ぎをするたび、その一瞬の空白を埋める相づちを打つことだけだ。女は自分の意見が求められている訳ではないことをすでに学んでいる。アドバイスを求められているわけではない。ただ聞いてあげればそれでいい。それは彼女の母に限つたことではないと女は知つている。多くの人は多くの場合において話すという行為自体を求めているようと思える。もしかしたら話す内容はたいして重要ではないのかも

しれない。示唆に富む哲学的発言なんて必要ないのかかもしれない。

何か適当な歌の歌詞の朗読でもいいのかかもしれない。結局は何をいつても、それがどれほどに世界の真実を暴いていたとしても、特に何も変わりはしないのだから。

「お父さんが帰ってきたみたいだから」飯の準備はじめなきや。じやあね」と言って電話が切れた。

うん、じゃあね。女は電話口にむかって返事をした。

夕食を食べ終え、食器を洗い終えると時間は8時を少しまわっていた。彼女は沸かしててのお湯でアルグレイをいれて、リビングのソファーに座つた。クッショוןを抱えて、それを2回ほど軽く叩いて形を整える。そしてテレビをつけてソファに沈み込んだ。

いつの間にか眠つてしまつていた。12時40分。4時間は寝ていたことになる。信じられないくらい長い間、ソファのうえで眠つていたようだ。テレビのスクリーンはさつきよりもまぶしく感じられた。

顔を洗おうと立ち上がった女の頭の中を、微かな違和感がよぎつた。もしかしたら何でもないかもしない。しかし確かに違和感が女の中に存在している。この感覚はどこから生じているんだろう。彼女はゆっくりと目だけを動かした。左から正面、そして右。変化の兆候らしきものがあれば必ず拾い上げる自信はあつたが、とくに異変は見当たらなかつた。そのまま体を右回転でゆっくりと動かしていく。変わつた所は特にない。女は小さく息をはいてから洗面所へ歩き出した。きっと疲れてるんだわ。

彼女は顔を洗うとすぐにベッドに潜りこんだ。4時間の眠りから田覓めたばかりだといつのにすさまじい眠気が彼女を襲つていた。手を顔の高さに上げることさえも氣だるく感じてしまうほどだつた。

彼女は仰向けになつて厚手の毛布を「こ」下まで持ち上げた。そして目を閉じた瞬間には深い眠りの中に沈んでいた。

沈殿した意識の中で誰かが何かを語っていた。静かで、重たい声で。そう、その声は実際に重たかった。いつたいどうしたら声が「重み」という物理的な性質を持ちうるのかは女には分からぬ。でも、それは確かに重たい声だったのだ。

ゆつくりと、そして何度も、その声は女に何かを告げていた。

僕、眞実は立ち位置で決まるものー（前）

僕は結局横浜に行くことにした。僕とコリーで。店で座つて一日を過ごすよりはいくらか魅力的な考えに思えたからだ。

日曜の首都高は車が折り重なるように連なつていた。車のルーフに反射する太陽の光がまぶしく輝いていた。環状線から芝浦ジャンクションを抜けると徐々に車が流れ出した。僕はこまめにアクセルとブレーキを踏みわけた。その間コリーはおとなしく助手席に座つていた。

「渋滞はぬけたから、これで大丈夫」と僕は試しにコリーに向かつて言つてみたが、もちろん返事はなかつた。

僕は運転しながら、どこかで聞いたことのある犬と飼い主の話を思い出した。テレビのドキュメンタリーで見たのだと思う。犬が主人の心臓発作の兆候を感じ取つて事前に教えると言つた内容だつたはずだ。普段は大人しい犬が、突然吠え出す。すると決まって数分後に心臓発作が起ころる。最初は偶然だと思つてた飼い主も、3度も繰り返された警告を偶然だと笑い飛ばすことはできなかつた。それから犬が吠えると必ず薬を飲む。おかげでそれ以来心臓発作は起つていない。そんな感じだつたと思つ。

僕は山下公園の近くに車をとめた。日曜といつこともあつてパークリングの多くは満車だつたが、運良くほど近い場所に空車サインを見つけることができた。

公園では人々が思い思いの方法で初冬の太陽を楽しんでいた。ベンチに座つてコーヒーを飲んでいるカップル。キャッチボールをしている親子。ボールを蹴り合つている子供たち。誰もが幸せそうに見えた。僕は公園の芝生の上でコリーを放した。彼女は嬉しそうに僕の周りをしばらく駆けてから遠くのほうへと走つていった。

芝生は深みのある緑をたたえていた。昨日までの雨のおかげだろ

う。右足に力を込めて踏ん張つてみると、水分を含んだ地面に踵の部分が埋まるのがわかつた。ゆっくりと右足を浮かすと、そこには足跡が異様なほどにくつきりと残されていた。

僕はしばらくの間、黙つてコリーの様子を眺めた。コリーはあるで蝶でも追いかけているように左右に駆けている。顔を宙に向け、前足と後ろ足を命一杯に広げて跳ね回っている。左へ、右へ、左へ。とても気持ち良さそうだ。僕は最後に全力で駆けたのがいつだつたか思い出そうとしてみた。でもどれだけ考えても無駄だつた。高校での体育の授業が思い出せる限りの最後の全力疾走だつた。もしかしたらそれ以来、一度も全力で走つたことはないかも知れない。そう考へると、少しだけ寂しい気がした。

「コリーは賢い犬だつた。慣れない僕の家でも無駄に吠えたりしなかつたし、僕の言葉に従つた。毎朝、僕は店の犬3匹とコリーを連れて散歩にでた。彼らもつまくやつていてるようだつた。

営業中は、これまでにもましてドアを眺めるようになった。彼女がコリーを引き取りにきてくれるかもしれない。可能性は低い。でもありえることだ。

次の日曜日も僕は店のドアを眺めて過ごしていた。ドアは開くことを忘れてしまつたかのように入り口に立ちはだかつていた。

隣で丸くなつたコリーの体は呼吸に合わせて小さく上下している。僕の呼吸よりも速いペースで小さい体が上下している。短くて艶のある毛が一方向に流れている。顔は茶色、背中は黒と、足は白。体は3色の毛で覆われている。どれも同じ長さだ。それぞれの境目はアフリカ大陸の国境線のようにきれいな境界線を描いている。ときどき思い出したように尻尾が振りあがる。地面に置かれていた尻尾は勢いよく跳ね上がり、鞭のようにしなり、そして再び地面に着地する。

ドアは閉じたままだ。真ん中に多きな縦長のガラスが埋め込まれ

てこる。それはドアの中心に位置し、膝から田の高さまでを上めている。ドアは木製だが、木目は見えない。茶色の塗料がのつべりと、そしてとても均一に塗られている。下から上までどの一点をとっても、どんな些細な違いも見られない。僕はそんなドアが何枚も作られている場面を想像した。どこかの町の、小さな工場。塗料が正確に同じ厚さで塗られていく。そして同じドアが一日何千枚も作られる。そう、それらのドアは本当に同じなのだ。完成したドアは何万枚ものドアが眠る保管庫のような場所に運ばれる。彼らはそこで待つ。どこかの誰かに買われ、家のドアとしてその機能を果たす日を。ノブは金色だ。僕は自分がそんなドアの一枚になるところを想像してみた。周りには僕と同じデザインのドアが並んでいる。前も後ろも、左も右も、僕の視界が続く限りにびっしりと連なっている。早くここから出してくれないかな。ドアは思う。家の入り口として立派に役目を果たしたい。そして徐々に、倉庫の端から運び出されていく仲間を眺める。あれが自分であればいいのに。僕が彼で、彼が僕でも何もかわりはないのに。

結局、この日も彼女はやって来なかつた。僕はコリーを連れ、重たいドアを押して店を出た。

彼女がやつてきたのは水曜だつた。冬の雲を抜けて薄い日差しがさす午後だつた。

僕、眞実は立ち位置で決まるものー（中）

「「Jの前は」」めんなさい」と彼女は言った。

「大丈夫ですよ」僕は平静を装つて答えた。「とにかく今日来てく
れよかつた。それにコリーと十分に過ごすこともできました」

彼女は僕の言つたことに対して何かを考えた様子を見せて、それ
から言つた。「引き取つてもれますか？」

僕は彼女の目を覗き込んだ。僕の心はすでに決まつていた。不本
意ではあるが、コリーのことを考えると僕が引き取るのが最良だろ
う。ただペットを売る立場にある僕の職業的使命は、犬たちを深く
愛してくれる飼い主を見つけることにある。すこし大袈裟かもしれない
けれど。その使命があるからこそ、そこに意義を見出せるから
こそ、僕はくる日もくる日も飽きもせずにここに座つて、いつやつ
てくるかもわからない飼い主たちを待ち続けることができる。

僕はしばらくの無言の後で、あらかじめ決めていた質問をした。
「引き受ける前に、どうしても一つだけ聞いておきたいことがあります。どうしてコリーを手放すんですか？この一週間、僕なりに考
えてました。僕が見た限り、できれば一緒にいたいと思つてるはず
です。それにコリーもあなたになつています。僕みたいなペット
ショップのオーナーの立場から言わせてもらえば、ここにいる犬た
ちにあなたのような飼い主を見つけてあげることが僕の仕事です。
それなのに僕はその逆のことしようとしてるんです。正当な理由なく、簡単に引き受けることはできません。今のところ、あなたは僕
にどんな理由も提示してくれていません」

彼女はしばらく僕の顔を見ていた。そこから感情を垣間見ること
はできなかつた。眞実を語るべきかを迷つてゐるようにも見えるし、
何か言い訳を考えているようにも見える。もしかしたら何も考
えないかも知れない。僕を説得するための作り話はすでに考
えて、それを切り出すタイミングを推し量つてゐるだけかもしれな

い。

僕は続けた。「僕の答えはシンプルです。僕はコリーを引き取つてもいいと考えています。ただし、そこには条件が一つだけあります。あなたは僕にコリーを手放す理由を教える必要があります」

そこまで言つてしまふと、これ以上話すべき言葉は見つからなかつた。店内は深い沈黙に覆われた。冬の空氣のように張りつめた静けさの中に、犬たちの静かな呼吸が聞こえる。それは夜中に響く水滴のように、静けさを一層際立たせた。

彼女は長い間考えた後でとても静かな声で言つた。

「私のせいで人が死んでしまいました」

僕は彼女の説明が作り話である可能性を祈つた。

僕は小さなカウンターの後に座つていた。彼女はカウンターをはさんで置いてあるパイプイスに席をとつた。僕は彼女と入れ替わるように一旦席を立ち、ドアに閉店サインを下げてから戻つてきた。それから奥の冷蔵庫からアイスコーヒーを出し、グラスに入れて、彼女と僕の前に置いた。そうしている間に少しだけ落ち着いた気になつた。僕はさつきよりも少しだけ深く腰掛けた。「あなたのせいで人が死んだっていうのはどういうことですか?」

彼女の目が天井を見上げた。僕もつられて目を向けたが、そこにはいつも天井がいつも通りにあるだけだった。

「私にはコウという同じ年の恋人がいました。8年間ずっと一緒にした」

彼女は長い間話した。とても長い間。彼女は、自分が発する言葉と、その合間に生まれる沈黙の重みを推し量るようにゆっくりと話した。僕は、時々小さく相槌を打ち、彼女の話に耳を傾けた。

彼女には大学以来8年間付き合っていた彼氏がいた。コウという名だ。私達は似たもの同士だったの、と彼女は言つた。お互いを必

要としていた、と。彼女とコウの出会いは学科対抗のソフトボール大会だった。コウは温かい人柄で人望が厚く、自然とそのチームの中心的な役割を担っていたらしい。

「彼は明るくて、裏表のない人でした。気がつくと周りに人が集まつていて、リーダーになっているようなタイプだつたんですね」と彼女は言った。その言葉は僕に対して語られているが、僕を通り過ぎてどこか遠い場所に向かつて話されているように聞こえた。それもかなり遠い場所に向かつて。

2人は自然と惹かれあい恋に落ちた。彼女はコウといふとそれまでなかつたくらいに安らぐことができた。それは彼女が経験したこのない類の感情だつた。彼女はいつも誰かに頼られて生きてきたからだ。いつも誰かが彼女に相談を持ちかけた。人生を決めてしまうような大きな相談から、恋人の浮気に関する相談までその種類は様々だつた。友人たちはそのような相談を抱えて彼女の元へやつてきた。彼女は人生の割と早い段階から自分のその役割に気付いていた。そう、最初は小学校の時だつた。名前は忘れてしまつたが、同級生の女の子から恋の悩みを相談されたのが始まりだつた。それ以来、彼女にはとても多くの相談が投げかけられた。

「でも勘違いしないで下さい。別にそれが嫌だつたわけじゃないんです。みんなが私に相談にくることを嬉しく思つたこともあります。だつて誰かに頼りにされるつていうのは、とても幸せなことですよね」と彼女は言った。

僕は小さく頷いた。

「だから私も、それがどんな些細な相談であれ真剣に答えてあげました。私の友達にとつて私は頼れる存在だつたんです。でもコウと一緒にいるときはそのプレッシャーから開放されました。私たちが一緒にいると、みんなは私じゃなくコウを頼るんです。最初はどうして彼と一緒にいることが、これほどまでの安らぎを与えてくれるのかつて不思議に思つていました。ただ漠然とした安心感に包まれている気がしていました。でもしばらくしてわかつたんです。

それまでどのくらい誰かに頼られることが自分のプレッシャーになつていたかが

「彼女は口元に小さな笑みを作つていった。「別に自慢しようとしているわけじゃないんです。ただ事実としていつもそんな役割だつたんです」

ええ、と僕は同意した。

「楽しい大学生活でした。付き合い始めて2年後に私たちは同棲を始めたんです。3年生の9月だったわ。私たちは将来についても話しました。どちらから言い始めたかは覚えていないけど。でもごく自然に、当たり前のように私たちは結婚するものだと思っていたんです。それは「ウも同じでした。いつぐらいに結婚しようかとか、子供は何人つくろうかとかそんな会話を2人でよくしました。将来を考えているカップルなら誰もがするようなありふれたものだけど、でもそういう話をしていると本当に幸せな気持ちになることができたんです。大学を卒業してすぐに結婚することも考えました。でも結局は結婚資金をためてから、子供の養育費をためてから結婚しようつてことになりました。そういう意味では現実的だつたんです、コウも私も。

彼が就職したのはコンサルティング会社でした。外資系の。人受けがいい性格だからどんな会社に行つてもうまくやれていたはずですけど、彼が選んだ会社は彼にぴったりでした。あつていたんですね。とてもオープンな会社でした。それに実力主義もありました。1年目だからって見ぐびられたりすることはなくて、筋道の通つた提案をすれば、それがどんな大きなプロジェクトに関することでも意見を採用してもらえるつて喜んでました。私にはそれがうらやましくて。ほら、私は業務でしたから。いくら海外業務つて言つても、私の意見なんて必要とされていないんです。私に求められてるのは、黙々と納期なり金額なりを画面に打ち込むことだけだから「彼女は店内で息を潜めるようにじっとしている犬に静かに目線を落とした。そして付け加えるように言つた。「会社で働いたこと

はあります？」

ある、と僕は簡潔に答えた。

それからしばらく迷った後、従業員が50人程度の小さな会社で営業をやっていたことを彼女に教えた。「つまらない仕事でした。ネジを作ってる会社だったんです。毎日得意先の会社を回つてネジをもつと買つてくれるよう頼むんです。2年働きました。でも何だか虚しくなつて辞めたんです。はつきり言つてネジなんてどうでもよかつたんですよ。興味なんてありませんでした。どれだけ一生懸命に商品を説明してみても、自分にはいまいちピンとこないんです。わかります？ それなのに朝早くから満員電車に詰め込まれて運ばれるように会社に行って、夜遅くまで働いて、夜は上司や社長に付き合わされるなんて馬鹿らしくて、本当に」

「そう、本当に馬鹿らしかつた。

「気持ちはわかります。私も同じだから……」 彼女は声を落として言った。

僕は、ええ、とだけ答えた。そして黙つた。彼女も黙つた。僕はそれ以上自分の身の上話を続けるつもりはなかつた。

「それで、いつたい何があつたんですか？」

彼女はタンポポの綿毛を飛ばすように息をはいた。「私とコウは社会人になつてからも上手くやつっていました。もちろん学生の時よりも時間的な制限は多いし、仕事上の付き合いも増えたせいで会う時間は減りました。でも幸い2人とも土日が休みだったんです。お金に余裕もできたし。だからその分思いつきり土日を楽しんだの。そんな生活が5年続きました。でも……」

「でも」 僕は彼女の言葉を繰り返した。

「でも、……」

彼女の視線は未だにコリーに置かれていた。何かを見ているの訳ではない。その視線には目的は感じられなかつた。ただ、視線の置き場としての対象を探しているにすぎないのだろう。彼女は無言でコリーを見ていた。彼女の唾を飲み込む音が聞こえそうなくらいに

店内は静まり返っていた。犬の呼吸。彼女の唾をのむ音。僕の呼吸音。まるで映画の効果音じゃないか。

「でも、それが永遠に続くことはありませんでした」と彼女は言った。自分に言い聞かせるような口調だった。「もしかしたら何かがあつて別れることがあるかも知れないって思つたことはあります。そんなの当たり前だから。恋愛に別れはつきものですよね。私もそこまでナイーブじゃありません。

そして私とコウの終わりはちゃんとやつてきたんです」

僕は依然として彼女の話の着地点が見えていなかつたが、小さく頷いて話の続きを促した。僕は聞くしかない、少なくとも今のところは。それだけが僕に与えられた選択肢なのだ。そう心の中で考えると、思わず口元が緩んでしまつた。まるで、どこかで読んだハードボイルド小説の一節じやないか、と僕は思った。それだけが僕に与えられた選択肢なのだ。僕に選択の余地はないのだ。

「私は他の人を好きになつてしまつたんです。コウ以外の男性を。その気持ちはあまりに唐突にやつてきて、そして理不尽なまでに強力でした。それまで感じたどの感情をも凌駕するくらいの勢いで、私の心を押し流してしまつたんです。

その男性に会つたのは、ちょうど今から1年前のことでした。会社の先輩に誘われて飲み会に参加する機会があつたんですが、そこにいたのが彼でした。彼はコウとは全く違つた雰囲気の男性でした。デリケートな印象つて言えばいいのか…繊細な感じがする人だつたんです。そしてとても美しい顔つきをしていました。ただ格好いいつていう感じじゃないんです。女性的な美しさのようなものがあつたんです。

とにかく、私は一目で彼に恋をしてしまいました。性格がどうとか考えている余裕すらないほどに、私は彼に惹かれていたんです。今から思うと、どうしてあそこまで強く惹かれたのかわかりません。でも、その時の私にとって、その力は絶対的でした。それに、とても自然なことに思えたんです。まるで重力を受け入れるような心境

でした。あつて当たり前のもの。存在して当然の力。そんな感じです。ごめんなさい、曖昧な説明で。でもとにかく、私は彼に恋をしてしまったんです。それも絶望的なまでに強く

「彼女は自分の気持ちを確認するように頷いて見せた。

「私は自分の気持ちを抑えておくことができませんでした。そんなのは絶対に無理だったわ。彼も同じ気持ちだった。始めてあつた飲み会の途中から、私は彼が欲しくてたまらなかつたの。自分でも信じられないけど、ほんとうに。そしてその夜に私は彼と寝ました。とても当たり前のようにホテルに行つて、何度もしたわ」

彼女は完全に自分の世界に入つているようだつた。彼女の言葉はもはや完全に僕に向けられたものではなくなつていた。それはもつと内向的で、耳を閉ざしたいほどに個人的だつた。それを目の前の彼女は恥じる様子もなく淡々と語り続けている。僕は思った。

彼女はこの話をするためにここにきたのだ。

僕、眞実は立ち位置で決まるものー（後）

彼女は自分自身に向けてこの言葉を語りしている。でも語るだけでは足りない。彼女には証人が必要なのだ。だれかがそこにいて、見届けてあげる必要がある。彼女が自分に向けて語る言葉を聞いてあげなければいけない。そしてその役割が僕に降りかかるってきたのだろう。

「その後も、私は彼、ユウタと会い続けました。平日の仕事が終わると新宿か池袋で待ち合わせて、そのままホテルに行きました。コウには仕事が忙しいと嘘について。

頭ではわかつていたの。自分がどれだけひどいことをしているか。どれほど間違ったことをしているか。そして私はコウを愛していました。彼を愛遣う気持ちは変わらなかつたし、自分の事のように彼を大切に思っていました。その気持ちは心にちゃんと残つていた。でも、それでも私は自分を止めることができなかつたんです。私の体がユウタを求めていたの。理性以外の全ての感覚が、私の細胞の全てが、ユウタを求めていたの。

ホテルを出て、家に帰つてコウに会つたびに思つたわ。もう絶対にユウタに会わないことにしよう。明日は絶対に待ち合わせの場所には行かないでおこう、つて。何度も。毎朝その決意を持つて家を出るんです。ランチの時間だつて、今日はこのままちゃんと家に帰るんだつて思つてるの。でも夕方になつて、終業時間が近づくにつれて、体の中が熱くなつてくるんです。どうしようもなく。体の中に何か異物があるような感覚つてわかります？ゆっくりと揺らめく炎のようなんです。それがどんどん大きくなつてくるのが自分でもわかるの。そして気がつくと、私の足はユウタとの待ち合わせ場所に向かつていたんです。

そんな生活が7ヶ月ほど続きました。ユウタとほぼ毎日ホテルに行つて、それから家に帰つてコウに会つ。とても辛い日々だったわ。

何も知らないコウの顔を見ると、どうしようもない罪悪感がのしかかってきた。コウとの関係をきれいに終わらせるべきだと何度も考えた。でもそれさえも出来なかつたの。私は彼を愛していたから。私はコウを愛しいて、同時にコウタを求めていた。自分勝手なのはわかつていました。でも、それでも、何も決められないまま時間だけが流れていきました。

そんな生活が8ヶ月くらい続きました。その間、私はコウを裏切つている罪悪感と、コウタに会つた時に感じる満足感の両方を抱えて日々を送つていたんです。でも、とうとう終わりがやってきました

「彼女は睡を、ひとつ、飲み込んだ。

「ばれてしまつたんです。コウタのことが。たまたまでした。私の父が脳内出血を起こして倒れたんです。それで私の家に電話をかけきつたんです、母が。もちろん最初は携帯に連絡がありました。でもちゅうど私はその時にコウタとホテルにいたから電話に出ることができなかつた。それで母がマンションに連絡をしたんです。事情を知つたコウは会社に電話したの。私はその日も嘘をついていました。残業だつて。でもコウが会社に連絡を入れた時、私はいなかつた。それがきっかけでばれちゃつたの。適当にごまかす事はできなかもしれない。友達とご飯を食べてて電話に気付かなかつた、とか言いようはあつたと思う。でも、そうしなかつた。もしかしたらもう疲れていたのかもしれない。心のどこかには、ばれて欲しいって気持ちがあつたのかもしれない。コウのためにも、自分のためにも、やつぱり真実を言わなきゃいけないつてずっと思つてたから。全てを話しました。もう8ヶ月も二股をかけていること。コウを愛している気持ちは変わっていなければ、それでもコウタから離れられずにはいること。一つ残らず話したの。コウは静かに話を聞いてくれた。とても悲しそうな表情で、たまに頷きながら。本当に悲しそうだった、本当に」

彼女は自分の発した言葉が空気に染み入るのを待つかのように辺

りを見回した。ドアの外の日差しはせつゝよつもさらりと薄く平たく引き延ばされたような印象を僕に与えた。冬至が間近に迫っている。昼は短く、夜は長い。まだ4時過ぎだところで、日差しには夕闇の気配を感じることができた。

彼女は焦点をもう一度調整するかのように僕を見て、それから再び口を開いた。

私、過去と未来の同義性ー（前）

母が私に事実を告げた夜からしばらくの間を私は何もせずに過ごした。まるで世界がその回転を止めてしまったような日々だった。もちろん私は毎日仕事に行つた。お密と会話だつてした。でも私はそこではないどこか別の場所にいた。

ふと気がつくと、意識がどこかを彷徨つ正在することもしばしばだつた。気がついて時計を見てみると、一時間たつて正在ることもあつたし、一分しかたつていなつこともあつた。感覚が途方もなく平たく引き伸ばされていよなうな気がした。全ての物音はゆっくりと私の耳に届き、人々の声は鈍く響いた。そう、まるで深海で聞く鐘の音のよつて。

朝になると目を覚まし、服を着て、家を出た。極めてシンプルで起伏のない一日。仕事が終わると家に帰つて眠りにつく。どうしても必要な時以外は誰とも口をきかなかつた。朝と夜に母とは顔を合わせた。言葉も交わした。でも、あの夜以来、病氣に関する話題が私達の間で交わされたことはなかつた。何度かナオコからの着信が残つていたが、折り返す気にはなれなかつた。いつもは何かがあれば、私はナオコに電話をかける。彼女は私の親友であり、全てを分かち合える唯一の人間だから。でも、今回ばかりは無理だつた。少なくとも、まだ無理だ、と私は思つた。私は自分自身とすら話せいなかつたのだ。自分自身を一つの存在としてつなぎとめておけるかさえ確信がもてないでいたのだから。そのような状態で誰かと話をすることは不可能だつた。そつ、それがたとえナオコだつたとしても。

私はいろんな事を思い出した。奇妙なものだけれど、将来についてはほとんど何も考えなかつた。考えなければいけないことはいくらでもあつたはずだ。母がいなくなつたらどこに住めばいいのだろうか？この広い一軒家で私一人になるのは嫌だ。どこかにアパート

でも借りればいいのだろうか？母の治療費はどうすればいいのだろう？回復することはあるのだろうか？挙げていくときりがないほどに問題は山積していた。それは疑いようのない事実だつた。それをきれいに並べていけば、万里の長城のような城壁を視界の限りに築くことができただろう。でもそんな状況で、私の頭を占めていたのは思い出ばかりだつた。何歳だったか正確に思い出すことはできない。母といった公園の風景。私と母の近くで、同じ年くらいの男の子が父親とフリスビーをして遊んでいる。私はそれをとても羨ましく眺めている。そんなどうしようもないような思い出。そういうものが鮮明に記憶の流砂のなかに浮かび上がってきた。

母の様子にはいつもと変わったところは見られなかつた。私以上に動搖しているに違いない。なんといっても実際に癌にかかるつてるのは母なのだ。死と向き合わなければならぬのは彼女なのだ。それでも彼女は気丈に振舞つていた。私に氣を使つていたのだと思う。私の口数が少ないうことにも気がつかない様子で、私に話しかけてきた。余りにも普通すぎて、もしかしたらあの夜に母の口から告げられたことの全てが私の頭の中だけで起こつたことなのじやないかと思えてくるほどだつた。でももちろんそんなことは、ない。癌細胞は、今この瞬間もせつせと彼女の体を蝕んでいる。突然私は癌細胞が憎くてたまらなくなつた。ついさつき掘り当てたばかりの井戸から湧き出る水流のように、私の中に憎しみが湧き出てくるのが感じられた。どうして私の母が癌にならなければいけないのだろうか？父親が他界した後、彼女は懸命に働いて私を育ててくれた。文字通り眠る時間を惜しんで働いたはずだ。そうでもしなければ、女手一つで子供を育てるなんて無理だらう。そしてやつとの思い出ひとり立ちさせた娘。これからは自分のための時間が持てたはずなのに。そう考えると怖いくらいに憎かつた。そして私は残されてしまう。母がない世界に、たつた1人で。

私、過去と未来の同義性ー（中）（前書き）

明日から2日に一回のペースでアップします。
感想、アドバイスなどあればお待ちしています

私、過去と未来の同義性ー（中）

ゆるい坂道を下るよしに日々は流れていった。私が母の病気を知つてからもうすでに3ヶ月が経とうとしている。12月の富山。空は分厚い雲に覆われる日が続いていた。

最初のショックは過ぎ去ったが、私の心は錨をさげられたように重たかつた。でもいつまでもこのままではいられない。母に残された期間は、私にとって彼女と過ごすために残された期間でもあるのだ。

私は意識的に母親と過ごす時間を増やした。特別なことをした訳ではない。ただ、いつもより少し早く帰つてきたり、お茶を飲みながら話をしたり、買い物にでかけたり、そんな感じだ。母の態度は相変らずだった。彼女は健康そのものに見えたし、表情は以前にも増して活力が溢れていた。それは一つの事実を私に告げていた。彼女は病気を受け入れたのだ。自分の運命を受け入れたのだ。私は彼女の意志を尊重しなければいけない。もしも彼女が残された時間を後悔することなく生きたいのであれば、楽しみたいのであれば、私だけがいつまでも暗い顔を引きずつている訳にはいけない。

そういうえばナオコと最近話していないな、と私は思った。彼女と話がしたい。そう思つて携帯をバッグから取り出して、電話をする。この時間なら彼女はもう家に帰つているはずだ。でも彼女は電話に出なかつた。10回目のダイアル音が消える前に私は電話を切つた。もうしばらくしてからかけなおそう、と思いベッドに横になり目を閉じるとすぐに深い眠りがやつてきた。

決断をする必要がある。母の病気を知つた日から、私を悩ませているもう一つの問題。私は母にひみつを伝えるべきなのだろうか？私は頭の中で何度も彼女に真実を打ち明ける場面を想像してみた。お母さん、実は私は同姓しか愛せないので、神妙な面持ちで話すべき

なのだろうか、それともふざけた感じのほうがいいのだろうか。どれだけ考へても結局は堂々巡りに終わってしまった。母がどのような反応をするか私にはわからなかつた。まったくといつていいほどわからなかつた。母親として、彼女は私をありのままの姿で受け入れてくれるだろう。それに關して疑いの余地は無い。だからと言つて、私が抱えるこの特殊性に關して、彼女が何らかの現実的な力を及ぼせるることはできない。彼女の言動によつて、私の性的趣向が変わるわけではないのだ。そうだとすると、私は死に瀕する母親に必要な心配を与えるだけになつてしまつ。彼女は死の床で、同姓しか愛せず子供を作る事もできない娘の将来を嘆くことになるだろう。その考へは私をとても悲しい気持ちにさせた。その一方で、娘の本当の姿を知らずにこの世を去つていくことを母は決して望まないはずだ。実の娘がどのような人間なのか、母親には知る権利がある。

思考がいつもと同じ経路を辿り、同じ壁にぶつかる。今日は仕事に向かう車の中だ。何十回、何百回と辿つた道だ。駐車場に車をとめて、小さく息を吐く。

やつぱりナオコと話をしなきや、と私は思つた。彼女と話せば決断を下すヒントが得られるかもしれない。

その夜もナオコは電話にでなかつた。残業しているのだろう。地方の花屋で働く私と違い、ナオコは東京の貿易会社で働いている。月末が近づくと、終電で帰つてくる日が続くような生活だ。私は電話ちよーだいとメールをして、ベッドに潜つた。

毎日顔を合わせる私にとつては、母の様子は以前と全く変わらないような気がしていた。でも従弟の結婚式で挨拶を交わした親戚の何人かが、母に向かつて「やせたんぢやないの?」と言葉をかけた。もちろん彼女たちに悪気はない。それらは褒め言葉として意図されたものであるし、通常であれば母くらいの年代の女性がやせたと言われれば喜ぶだろう。しかしその言葉は針のような鋭さで私を刺し

た。やっぱり癌は確実に母の体を蝕んでいる。いくら田に見えなくとも、いくら些細な症状から田をそむけようとしても、毎日癌は進行し、母は定められた終着点に向かつて着実に進んでいるのだ。

2次会が終わったのは夜の7時だった。従弟は友人や何人かの親戚たちと、3次会へと向かつた。私は母と一緒に会場を後にして家に向かつた。2人もお酒を飲んでいなかつた。母は自分が運転すると言つた。

「いいよ、私が運転するよ」と私は答えた。「私もお酒飲んでないしさ」

「でも疲れてるでしょ。昨日まで仕事だつたんだし。お母さんが運転するから目でもつむつていきなよ」

「大丈夫。なんとなく運転したい気もするし、私がするよ」と私は言つた。

じゃあお願ひね、と母は答えた。

会場があつた市内から私の家までは車で30分ほどだ。国道をまつすぐに南下するだけの単調な道だ。

「少しだけ寄り道してもいい?」と私は母に尋ねた。

「いいけど、どこに?」と母は私に尋ねた。

「珍しく天氣もいいし、少し夜景でも見たいなつて思つて。まだそんなに遅い時間じゃないしわ」

「いいわよ」と母は頷いた。「冬は空氣もきれいだしね。きれいな夜景が見れそうね」

私はゆっくりとハンドブレーキを解除し、アクセルを踏んだ。

私、過去と未来の同義性ー（後）

土曜の夜の国道はスムーズに流れていた。全ての車が制限速度を15キロ程オーバーして走っている。「東京の渋滞ってひどいんだから」とナオコは顔をしかめて言っていた。といっても電話だったので本当にしかめ面だったかはわからない。でも私の頭の中での彼女はおもいつきりしかめ面をしていた。私は目の前の道路に再び意識を向けた。国道がまっすぐに続いている。信号がいくつかみえる。青のものもあれば、赤のものもある。私は父のことを考える。お父さんが生きていたら母の死を少し違った風にとらえることができたのだろうか。わからない。お父さんもやっぱり泣くのだろうか。私と母がそうしたように。わからない。お父さんが生きててくれればいいのに、と私は思った。これまでないほどひどく切実にそう思つた。

国道を右折して高台へと続く道を進んだ。それほど高い山ではないが、市街地を見渡すには十分な高さで夜景スポットになっている。途中で何台かの車とすれ違つた。頂上の駐車場には数台の車が止まつていた。おそらくカップルだろうが、中に入がいるかはわからない。私はそれらの車から少し離れたところに車をとめた。そしてしつかりとハンドブレーキを引いた。そして「着いたよ」と母に声をかけた。でも母は眠つてしまつていた。考えに没頭していく気づかなかつたが、どうやら出発してすぐに眠つていたようだ。母はとても気持ちよさそうに眠つていた。私は諦めて一人で少し歩くことにした。そしてマフラーを巻いて外へ出た。駐車場から見晴らし台までは30段ほどの階段を上る必要がある。車に鍵をかけて階段へと向かつた。

冬の空気はとても澄んでいた。まばらに設置されている街灯の明かりは、いつもより透明度を増したように輝いていた。私は冬が大好きだ。私がそういうと、ナオコを含めた友人たちは首を傾げる。

「だつてほとんど毎日曇りだし、雨も多いし。1月、2月になると雪だつて降るんだよ。どうして好きなの？」と彼女たちは聞く。「夏のほうが全然いいよ」

確かにナオコたちの言つ通りだ。雨や雪の日が大半を占める冬を好きだという人間は北陸にはあまりいない。それでも私は冬が好きだ。雪が降つた後の冬の空気がたまらなく好きなのだ。分厚い雪雲から降る雪が空気中の埃をすべて落としてくれる。空気はどこまでも透明で、夜の明かりは夏とは比べ物にならないほどに輝いてみえる。そんな夜にコートを着込み、マフラーを巻き、手袋をし、夜景をみに出かけるのが私の楽しみであり、富山が好きな理由もある。私は展望台へと階段を上つた。地面には昼間の雨の気配がまだ残つていた。滑らないように、注意して歩いた。

展望台に人影はなく、寂しげに立つている1本の街灯が展望台の一部をやけに明るく照らしていた。私はその明かりを通り過ぎ、暗がりになつている場所へと歩いた。ちょうど展望台の先端になつている部分だ。正面の木はカットされ、夜景がみやすいように視界が開けている。ベンチが一つ置かれ、その少し先にフェンスが設置されている。私はフェンスに両肘をのせて身を預けた。さつきまで私と母がいた市街地が見える。駅前にあるビルもよく見える。駅から遠ざかる電車の明かりも見えた。それらの明かりが空を埋める分厚い雲を少しだけオレンジ色に染めている。そんな光景をしながら、私の心は再び母と彼女の病気に向けられていた。別に何か新しい結論にたどりつける訳でもない。それでも考えずにはいられない。

突然後ろに何かの気配を感じた。それもただの気配ではなかつた。そこには私の背中を突き刺すほどの悪意が含まれていた。はつとして後ろを振り返ると、その男は、青白く輝く何かを振り上げていた。ナイフだ。全身が一瞬で凍りついたようにこわばつた。両足がその場にはりつけられたように動かなくなつっていた。男は躊躇なくナイフを振り下ろした。そしてナイフは私の胸を突き刺した。私は叫び声をあげることすらできずにその場に倒れた。右頬に触れた地面が

やけに冷たく感じられた。薄れてゆく意識の中で私は男の姿を探した。男は逃げる様子もなく、ただ立ち尽くして私を見下ろしていた。右手にはたつた今私の胸を刺したナイフが満足そうに光っていた。私は男の顔を見ようと視線をあげた。

そして私は見た。ぼやけていく視界の中に、あの男の顔を。

僕、可能性としての選択肢

そう、別的人生を送ることもできた、可能性として。他の道を選ぶこともできたのだ、可能性としては。でもそうしなかった、現実として。

僕は世間で一流といわれている私立大学を卒業した。在学中は割と真面目に授業を受け、割と真面目に勉強した。単位もとった。卒業もした。そして適度に遊びだつてした。一流企業に就職することはできたはずだ。僕が就職活動をした2000年は、バブル崩壊の余波から経済が持ち直そうとしている頃だつた。失われた10年。それによつやく別れを告げた2000年。新しい世紀の幕開け。僕が就職活動をしたのは、そんな時代と時代の狭間のような時だつた。人々は新しい何かに期待していた。そんなちょっとした高揚感が世間にうすい霧のように漂つっていた。それと同時に、失われた10年の間に消え去つてしまつた自信を再び手にできるのかに確証を持てずにいた。もしかしたらそれまでの10年間は特殊な期間なんかじゃないのかもしれない。それこそが我々本来の、すなわちこれから姿なんぢゃないだろうか？そんな感じだ。

僕が選んだのはネジの製造会社だつた。「アネックス」というのがその会社の名前だつた。ネジを作つて売つてゐる会社にしてはやけに小洒落てゐるなというのが第一印象だつた。50人程度の従業員を抱える小さな会社だ。その内の30人は工場で働いている。残りは営業と業務だ。僕は営業として採用された。

面接に行つたとき、社長は僕のレジメを物珍しそうに眺めた。それから顔をあげて、火星人でも見るような目で僕を見た。富岡社長は僕にどうしてうちみたいな会社を受けにきたのかを尋ねた。「何かとんでもない問題を持っていて他は全部落とされでもしたのか？」と彼は言つて、にやつと笑つた。でも不思議といやらしくはない笑い方だつた。

僕は彼の冗談に微笑んでから答えた。「いえ、何にも問題はありません。ただ、レジメに書いてあることは全部ウソなんですね」

社長の目が丸くなつた。「おいおい、冗談だろ」

「ええ、冗談です。心配しないでください、そこに書いてある学歴に間違いはありません。学生証だつて持つてます」

常識で考えれば、こんな冗談は面接の第一声で発するべき言葉ではないだろう。リスクが多くすぎる。でも社長はすごく気に入つてくれた。彼は大声をだして笑つた。そして僕にはわかつていたのだ。彼が好意的に反応するだろうことが。その冗談の後、面接は非常に寬いだ雰囲気で進行した。そして面接の終わりに、彼はその場で僕を採用したいと言い、僕はそれを承諾した。

当時僕が思つていたのは、結局のところどこで働いても同じだといつことだ。それがどんな大企業であろうと、官庁であろうと、東京の下町の今にも崩れそうな田の当たらないビルの2階にあるような零細企業であろうと、やることに大きな差はない。動かすお金に差はあるだろう。国や、経済に与える影響に差はあるだろう。ただ、純粹に労働作業として比較をした場合は、そこに差は生まれない。僕たちは朝になると会社に行き、そこで夜遅くまで言われたことをやり続けるだけだ。

それが働くことなのだから。

僕の目の前に座る女性は淡々と彼女の過去について語る。まったく知らないといつてもいい僕に向かつて赤裸々に事実を並べていく。可能性として彼女に与えられていた選択肢。できたかもしれないこと。起こったかもしれないこと。実際に選んだ行動。実際に起こつたこと。それらのすべては可能性としてはどこまでも均等なのだ。実際に起こつた現実と起こりえた可能性を隔てるのは一枚の薄い膜でしかない。すべての物事は起こりえる。しかし未来の地点から見た時、実際に起こつたことと起こつたかもしれないとの間には決

定的な違いが存在している。

そしてその違いは時に人の生死を分けてしまうことだってある。
僕の前に座る女性の場合のように。

ナオコ、世界の基盤はじこむやも脆いー（前）

2人はキッチンテーブルに向かい合って座っていた。

ナオコが話し終えてからずいぶん長い間、沈黙が部屋全体を包み込んでいた。コウは下に向けて身動き一つしなかつた。彼の表情は見えない。それでも彼が激しく混乱しているのは明らかだった。その感情は空氣をつたい、ナオコに届いていた。コウはどんな気持ちでいるのだろう。彼女はできる限りの想像力を働かせて、彼の気持ちを推し量ろうとした。でも無駄だった。自分の気持ちさえわからぬ私に、「ウの気持ちがわかるわけがない。

やがてコウはゆっくりとナオコに顔を向けた。「俺は…それでもナオコを愛してる。すごく悲しくて、すごく傷ついたけど、でもそれでもナオコと一緒にいたい。

だけど、そのためには約束してもらひが必要がある。もう、2度との男には会わないって、約束してもらひが必要がある。そしてナオコはその約束を絶対に守らなきゃいけない。もし、もしも、その男からどうしても離れられないなら、そう言つてもうひ必要がある。それだけははつきり言つて欲しい。俺か、その男か。選んでもらわなきゃいけない」

彼の頬には涙がつたつていた。ひとつ、ふたつ、ときれいな線を残してテーブルに落ちた。ナオコは額くことしかできなかつた。口元に全てを告げてしまつことで、何かが明らかになるかと思つていた。自分を追い込むことで、答えができるかもしれないと思つていた。それともコウが歩き去つてくれるることを期待していたのだろうか？それすらもわからない。

ナオコは何も答えられなかつた。何か言わなくてはいけないと思い、発すべき言葉を思い巡らせてみた。でもそのどれもが彼女の本当の気持ちを伝えてくれそうな言葉ではなかつた。私が考えている事と口にする事。そこには何か決定的な差があるよう思えた。ど

んな上手い言葉を並べても、それらしい表現を使つても、それらは、その場に合わせて合成された人工物のようなものでしかないのだろうか？結局は何を言つても私の心をコウに伝えることなんてできないのだろうか？

わからない。

「わからない」と声に出してみた。

コウは同じ姿勢でナオコを見ている。その表情から読み取れるのは悲しみだけだ。裏切りに対する怒りは見えない。私の顔はコウの目にどう映っているんだろう。そんな考えだけが次から次へと心に湧いてくるだけで、肝心の問題に関しては結論ができるような気配すらない。

「…」

「コウの声が聞こえた気がしてナオコが聞き返した。
彼は少し間を置いてから言った。

「一週間。

待つよ…一週間だけ待つよ。だからそれまでに、決めてくれ
ナオコには頷くことしかできなかつた。

その日2人は別々に眠つた。ナオコはベッドで、コウはソファで寝た。久しぶりに一人で眠るベッドはやけに広く思えた。そして電気を消した寝室はいつもより暗く感じた。ナオコは目を閉じて物音に耳を傾けてみた。でも何も聞こえない。午前2時。時間だけが静かに流れている。すごく泣きたい気分だつた。でも涙は出てこなかつた。何に対しても私は涙を流せばいいのだろうか？2人を愛してしまった自分を恥じてだろうか。それとも、2人に愛された自分の運命を嘆いてだろうか。コウを裏切つた事に対してだろうか。

結局は自分の為にしか泣けないので。思考がそこまで巡つて始めて、ナオコの目には涙が溢れていた。

ナオコ、世界の基盤はひじめても脆いー（中）

翌朝、ソファにコウの姿はなかつた。テーブルの上には一言メモが残されていた。仕事に行くよ。

それから一週間、ナオコとコウが顔を合わせる事はなかつた。コウは朝早く出社し、そして深夜に帰つてきているようだつた。そうしようと思えば、「ウに会うのは簡単だつた。ただ起きて待つていればいいだけだ。でもナオコはそうしなかつた。コウは私に時間を与えてくれたんだ。今はしつかり考えて、そして決めなきやいけない。

他の事は何も考えられなかつた。業務画面を見ている時、電車に乗つているとき、食事をしている時、彼女はコウとコウタの事だけを考えた。あらゆる側面から何かしらの結論を導き出そうとした。コウとユウタ。どちらを選ぶべきなのだろう。ユウタを選ぶ事はコウとの別れを意味する。でもナオコにはコウとの別れがどうしても現実に起こりうる事として実感ができなかつた。あまりに長い間コウは彼女の人生の一部であり続けてきた。彼と別れることは自分の体の一部を切り落としてしまうようなものだ。だからといってユウタに会えないなんて絶対に嫌だ、とナオコは思つた。体の全細胞が彼を欲している。ナオコはそれを感じることができた。そう、まるでお互いの重力に引っ張り合われている惑星だ。遅かれ早かれいずれは衝突する。会つ回数を重ねるたびに、その重力は強まつていた。現に、こつして悩んでいる間でさえ彼女はユウタを欲していた。早く一週間が過ぎ去ればいいとナオコは思った。どれだけ考えたつて正しい結論なんてでない。

月の上を歩いているような一週間だった。気を抜くと体が浮いてしまった。口にするもの全てが、ただ食道を落下して

いくだけだった。結局は体から排出されてしまう食べ物。必要な栄養分だけを抽出され、そして最後は不要物となり体外に出てくる。彼女が歩いていたのはガラスの通路だった。一步間違えば彼女の足場は崩れ落ち、彼女は底のみえない暗闇に落ちてしまう。そこはどこまでも不安定で脆い世界だった。

ナオコ、世界の基盤はどうまでも脆いー（後）

あの夜から一週間。ナオコは重い足を家に向かつて動かした。今田こそ、何かしらの結論を出さなければいけない。

玄関にはコウの靴がきちんと揃えて並んでいた。彼はキッチンテーブルに両手をのせて座っていた。先週と同じ場所だ。ナオコがそつとドアを開けると、彼は少しだけ口元を緩めて微笑んだ。そして、おかえり、と言った。「今日は早く帰ってきたんだね」

ナオコはうん、と頷いてから言った。「先に洗面所に行つてきて

もいいかな？」

「もちろん」とコウは答えた。「どこにも行かないよ」

ナオコは洗面所で手を洗つた。そして鏡の中の自分を覗き込んだ。そこに映る自分はひどく不確かな存在だつた。10分先の未来さえもわからない一人の女。自分がぐださなければいけない決断の答えさえわかつていいない女。その一方で早くこのジレンマから開放されたいと望んでいる女。そんな複数の人間が、曖昧に1人の人間として存在している。それもただの一人の人間ではなく、「私」として存在しているのだ。

リビングではコウが同じ場所に座つていた。ただ、テーブルには缶ビールとグラスが2つ置かれていた。ナオコが向かいのイスに座ると、コウは片手でプルタブを引き、グラスにビールを注いだ。心地のよい音が、ことこと、と響いた。こんな時でも、おいしそうな音は変わらない。2人は無言で乾杯をした。

一口で半分程を飲んだグラスにビールを注ぎながら、コウが言った。「わかってると思うけど、今日で一週間だ」そして一杯になつたグラスから今度は少しだけ飲んだ。「考えてくれた？」

「考えたよ。すごくたくさん。これでもかつてくらいに考え続けた。でも、…

でも、どれだけ考えても答えはでなくて。今日、コウの顔を見て、

今日感じた気持ちに正直な決断をしようって思つてた

「そつか。おれもナオコのことばっかり考えてたよ。今になつて俺が出来ることなんでないんだけれど。すべてはナオコの気持ち次第だから。でも、もつとああしておけばよかつたとか、あんなことしなきやよかつたな、とか、そんな」とばっかり考えちゃつて

うん、とナオコは答えた。

「ウは一度深く呼吸をして言つた。「で、結論は?」

「ウの田は真つ直ぐにナオコを見ていた。その田は不安に溢れていた。ナオコがこれまで一度も見たことのないものだつた。そして同時にそこには一抹の希望が隠されていた。ナオコが自分のもとに留まつてくれる、という微かな期待をウは抱いているのだ。ナオコは心が針金で締め付けられているような気がした。私は彼の期待には応えられないのだ。

ナオコは言つた。

「私はウが好きだよ…本当に。もう何年も一緒にいるけど、でもその気持ちは変わつてないの。それは信じて欲しい」「でも」とウは静かに言つた。

「でも…」とナオコは続けた。

「でも今、コウタと顔を合わせなくなるのはどうしても無理。私はできない。ウと別れることも嫌だよ。もちろん。このままいられたらと思う。でも、どうしてか分からぬけど、ウタに対してもうしようもなく引かれる。何か物理的な力でも作用してるんじゃないかと思うくらい。こんな気持ちを持ちながら、ウと一緒にいることはやつぱりできないんだと思う。私にはその資格がない。だから…」

「だから」とウはナオコの言葉をなぞつた。

「だから、別れたほうがいいと思つ」

「別れたほうがいいと思う」とウは再び彼女の言葉を繰り返した。彼の脳に、ナオコの言葉を染み入らせるよつた。

ナオコは黙つた。

「コウも黙つた。

時間が静かに経過した。こんな時でも時間は均等に流れているのだ。平等に、そして不公平に。

「そうか」とコウはしばらくして言った。

きつといろいろな状況を頭の中で繰り返し想像してきたのだろう。彼の声は静かだったし、顔からは激しい感情を読み取ることはできなかつた。

「そうか」と彼は繰り返した。

そしてそれから半年後に彼は自殺した。

僕とナオ「、生と死は対極であるけれど不平等な存在である（前書き）

個人的な理由で時間がついてしまいましたが、少しずつアップし始めます。

「僕とナオ」「生と死は対極であるけれど不平等な存在である

「口では自殺してしまいました」とナオは言った。

僕は黙っていた。どんな言葉が適切で、どんな言葉が不適切になるのか見当もつかない。

「私と別れてから借りたマンションで首を吊つたんです。彼の同僚が第一発見者でした。何日か無断欠勤が続いていたらしくて心配してやつてきたみたいです。それで管理人に連絡して鍵をあけて中に入つて彼が首を吊つているのを見つけたんです。机の上にはメモが残されていました。彼の両親と、そして私あてに。

私に知らせてくれたのは彼の両親でした。もちろん面識はありません。彼の実家にも行つたことがあつたから

僕は黙っていた。

「彼が自殺をしたと聞いたとき、私はそれほど驚きませんでした。もちろん悲しみはこみあげてきました。でも心のどこかでは、やっぱりかつて思う気持ちも合つた気がします」

彼女はしばらく黙つた。口にした言葉が適した着地点を見つけるのを待つようだ。

「生と死の違いについて考えたことはありますか?」と彼女は言った。

生と死?

ない、と僕は答えた。

生と死の違いなんて考えるまでもない。生きていることと死んでいること。街を歩く人々と墓に眠る人々。そこには絶望的なまでの差がある。生と死は磁石のN極とS極のようなものだ。対極として存在している。

「そうですよね、普通であれば考えるまでもないことですよね。生と死、つまり生きている状態と死んでいる状態は比べるまでもないほどに異なる存在です。まったくの正反対です。愛と憎しみ、プラ

スとマイナス、生と死。

でも私は違うと思います。愛と憎しみであれば、その一つの感情は性質として対極に存在していて、同等の存在です。プラスとマイナスも同じです。対極をなす一つの性質をのぞいては同等なんです。でも、生と死は違います。動いていることと動いていないことだけの違いではあります。その2つは不平等に存在しています、とも。それは一方通行なんです。生から死へとつながる道はあるのに、死から生へとつながる道はありません。愛は憎しみに変われるし、憎しみは愛に変われますよね。それとは全く違います。対極ではあっても、同等ではないんです」「

消えてしまうことはどうなんだろ？、と僕は思った。姿を消してしまった僕の彼女。「消失」は生に近いのだろうか、それとも死に近いのだろうか。そこには戻つてくるための道もちゃんと用意されているのだろうか。

「私のくだした決断によって、人が生の側から死の側へと境界線を越えてしまつたんです。今となつては私が何をしてもコウは戻つきません。死の世界にどっぷりと両足をつけて存在しています」「

僕は頷くこともせずに彼女の話を聞いていた。

「もしも、もう一度やり直せるとしたらどうするだろ？って考え続けています。同じ状況にたてば、間違いなく同じ選択をするはずです。きっと。それほどまでにコントロールできない衝動をコウタに對して抱いていましたから。

でももしもコウが自殺するとわかつていたらどちらを選んだんだろうって考えるんです。私がコウタを選べば、「コウは自殺する。そろうわかついたら私はどうしたと思いますか？」

そんなことを聞かれてもわかる訳がない。

わからない、と僕は答えた。

ナオコは続けた。

「私はそれでもコウのもとを去つたと思います。自分の幸せを犠牲にしてまで、誰かのために何かをしてあげることはできません。私

だけじゃなく、誰でもそうだと思います、大抵は。私にはわかつていたんです。コウが無謀なことをするかも知れないって。だからこそ彼の自殺を聞いたときそれほど驚かなかつたんだと思います。ひどい女ですよね。でも結局私たちは、私たちのいいようにしか物事を解釈できないんだと思うんです。例えば、何か不幸な事が起こるかも知れないっていう予感がしたとします。でも、実際に何かがお起るまで、私たちはその予感に目を向かないんです。それがよくない結果を暗示しているから。悪い予感に対峙する勇気が私たちに備わっていたとしたら、人間は違った生き方をしていくはずです。世の中はこれほどまでに不幸じゃないはずです」

僕は彼女の言った事を頭の中で整理しようとしてみた。彼女の言葉の部分部分は確かにある種の真実を語っているかも知れない。彼女の言葉を聞いていると、それが鋭く真実をつついでいるような感覚はある。でも、だから彼女が何を言おうとしているのかはわからない。そこには一貫性が見いだせない。少なくとも僕には。

「とにかく私には犬を飼う事なんてできません。コウをあちら側に送り込んだ人間に、自分以外の命を預かる資格なんてないんです。私は後悔はしていません。でも責任は感じています。その2つは別物です。私は彼を死に追いやった責任を背負つていきます。コリーは私の感情にとても敏感です。私が悲しんでいる時には優しく体を寄せてくれるんですよ。でも、それはコリーにとつての幸せとは言えません。私は2度と同じことはできません」

彼女の言葉はそこで終わつた。僕はしばらく彼女の様子をうかがつていた。でも、語るべき事を語つた彼女の口がそれ以上聞く事はなかつた。

「事情はわかりました」としばらく後で僕は言つた。「もう一日だけ考え方させてください。コリーはこのまま預かるんで、明日もう一度同じ時間にお店にきてくれませんか？」

ナオコは特に表情を浮かべずに、はい、とだけ答えて店を後にした。

彼女の去った後には、苦虫をかみつぶしたような空気が残された。

生と死は対極だけど不平等なものだと彼女は言った。
僕たちに悪い予感と対峙する勇気があれば世の中はよくなると彼女は言った。

私、なくてはならないもの（前）

母が心配そうな顔で私を見下ろしていた。さっきまで肌を刺していた寒さはなく、暖房のきいた空気が私を包んでいた。意識がそぞらじゅうに散らばっている。まずはそれらを集めなければいけない。私はできる限り大きく息を吸い込んでからゆっくりと吐き出した。私は病院のベッドに横になっていた。

「大丈夫？」と様子をうかがっていた母が心配そうに聞いた。

私は微笑もうとしたけれど、上手く口元が動かなかつたので、ただ小さく頷いた。私の手を握っていた母の手が震えていた。

「何かあつたんじゃないかと思つて心配したのよ、本当に。びっくりさせないでちょうどいい」

何か声をかけてあげたかたかつたけど、上手く声が出てこなかつた。

「お医者さんを呼んでくるからちょっと待つてなさい」といつて母は病室から出て行つた。

母を待つ間、私は何が起こつたかを思い出そうとしてみた。頭の中に残つてゐるいくつかの場面が時間軸を縦横無尽に散らばつているような気がした。私は大きく一つ息を吐いた。順を追つて思い出してください。

結婚式の後で母と夜景を見に行くことにした。助手席で眠つてしまつた母を残して一人展望台へ歩いた。展望台はとても寒かつた。フェンスに寄りかかつて夜景を見ている時に後ろに誰かの気配を感じた。そして・・・私ははつとして胸に手を当てた。私は胸を刺されたんだ。

脇の下に冷たい汗が吹き出してきた。

そうだ、誰かが私の胸を刺したんだ。白く光るナイフがこの私の胸を突き刺したんだ。ナイフが胸に突き刺さる感覚はまだ体に残

つて いる。

でも私の胸に傷跡はなかつた。刺された跡は何一つない。刺された場所を指先で撫でてみた。痛みはない。昨日の夜に鏡に打った体と変わりはない。スムーズな20代の肌があるだけだ。私は確かに刺されたはずなのに。私の脳が必死に回転して論理的な説明を探しているのを感じた。でも何かしらの結論が導かれる前に、病室のドアが開き、医者を連れた母が戻ってきた。

「意識が戻つてよかつたですね」と医者は言つた。30代前半の女医だつた。化粧気はないけど、とてもきれいな肌をしていた。どことなくナオコと似た雰囲気がある。きちんと化粧をすれば映えそうな顔立ちをしている。ただ私のタイプとはいえないけれど。

「突然倒れたそうですね。お母様がすぐに気づかれてよかつたですよ。幸い転倒時に頭は打つていなかつたようですが、この寒い中で長時間気を失つているのは危険ですからね」

違う、私は刺されたんだ

「とにかく、様子を見るために教一日は入院してもらいます」と女医は言った

誰かが私を襲つたんです

「一晩見て問題がなければ明日には退院できますよ」

私は必死で状況を説明しようとした。私は刺されたんだ、と叫びたかった。でも声は出てこなかつた。音声だけが私の喉で濾過されてしまつたように、軽い空気が口から漏れただけだった。お母さん、と叫ぼうとしても結果は同じだつた。

私は声を失つていた。

私、なくてはならないもの（中）

「寒いところで倒れてたからですか？」と母は女医に聞いた。
彼女は顎をひいて考える仕草をみせてから言った。

「外傷がないため、頭を打ってはいません。だからといって寒い所で倒れていたからといって、声が出なくなるという話は聞いたことがありませんね。通常、精神的なショックによつて一時的に声がでなくなることはあるかもしれません。もしかしたら、そもそも倒れた原因と関係しているのかも知れないです。以前にも、娘さんが突然気を失つたことはありましたか？」

「いえ、一度もありません。少なくとも私と一緒にいるときに娘が突然倒れたことはないです」

女医は紙とペンを内ポケットから出して私に渡した。

「書くことはできるかしら？」と彼女は優しく尋ねた。昨日初めてペンを握ることを覚えた子供に話しかけるような感じの話し方だ。声が出ないからといって私が愚かになつた訳ではないのに。

「何か変わつたことはありましたか？」

私は右手でペンを受け取つた。力はしつかり入る。文字を書くのは問題なさそうだ。でも何を？ いつたい何をどう書いたら女医と母の2人が信じてくれるだろうか？ 胸を刺されたんだ、と書いたとしても、実際その傷跡は消えてしまつていい。どうかんがえても2人を納得させられそうな説明は浮かんでこなかつた。結局私は諦めて、「特に何もない」とだけ書いてペンと紙を女医に返した。

女医は先ほどと同じように顎をひいて考える仕草をみせてから母に向かつて説明した。「正直にいって原因はわかりません。原因がわからないので、今の段階で治療することはできないということになります。ただ、痛みがあるわけでもなさそうですし、話を理解することができています。やはり一日様子を見てみるしかないかと思いま

わかりました、と母は答えた。

母の答えを確認すると、彼女は私に向かつて微笑んだ後で部屋を出て行つた。

母は私と一緒に病室に泊まるといったが、私は「一人で大丈夫だから、お母さんは家に帰つて休んでいいよ」と伝えた。母は納得しない様子だったけれど、特に文句も言わずに了解してくれた。口の聞けない人間と言い争いをすることはできない。世の中には話せなくて得することもある。

母が帰つて私は病室に一人になつた。いざ一人になつてみると、母がいたことでどれだけ気が紛れていたかが実感できた。もともと簡素な作りの病室が、さらにそっぽをむけてしまったような気がした。でも私には考える時間が必要なのだ。一人でじっくりと、今日自身の身に起こつた出来事を検証してみなきゃいけない。私はいくつかの可能性を頭の中で並べてみて、そのなかから最もらしいものをいくつか選んで、母がおいていった紙に書き出してみた。

まず最初に考えておくべきなのは、全ては私の見た幻覚にすぎなかつたという可能性だ。私は何らかの健康上の理由で倒れてしまい、その無意識の状態のなかで夢をみたか幻を見ただけかもしれない。

「?.全ては夢または幻覚だつた」と私は書いた。

実際に誰かが私を襲おうとしてナイフを振り上げた所で私は気を失つてしまつたという可能性もある。刺されるという恐怖が私の心に実際に刺されたような記憶を焼き付けたのかもしれない。

「?.トラウマティックな体験。（誰かがナイフを振り上げて私を襲おうとした?）」と私は少しだけ隙間を空けて書き足した。

そして最後は、本当に私は誰かにこの胸を突き刺されたという可

能性だ。ナイフは実際に私の胸に向かって振り下ろされて、そして私の胸をついた。実際に血は流れていない。そのナイフは私の肉ではなく、何か別の物に突き刺されたのかもしない。

「？ナイフは私の体ではなく何か別の物を突き刺した。」

突拍子もない話のようにも聞こえるけれど、ひとまず可能性として仮定してみる価値はある。私は病室に一人で横になっているだけで、声がないから友人と電話で話す訳にもいかない。時間はいくらでもある。

実際に紙に書いたものを読み返してみるとどれも同じくらいにばかりしく思えた。現実的かどうかというメジャーで測れば、？がリストの一番上にくるだろう。しかし、私は刺された感触を確かに記憶している。ナイフは間違なく振り下ろされ突き立てられた。痛みが衝撃波のように胸から体の端へと駆け抜け、それが弾ける。そこで痛みは消える。後はすべてが非現実的な色を帯びて、私は客観的に私が教わった場面を傍観するしかなかつた。それはどう考えても、幻覚や夢とは違う種類の現実性を伴つて私の中に存在していた。これが本当の出来事でないならば、いったい何が本当だと呼べるだろうか。そう考えると、？の可能性も排除しなければいけない。自分の中に焼き付いているこの感覚を信じるとすれば、私は本当に何らかの形で刺されたんだと考えなければ行けない。

私はもう一度？を読み返してみた。

「？ナイフは私の体ではなく何か別の物を突き刺した。」

そして首を振つた。まるでスタートレックの世界だ。昔見たエピソードに思考と現実を同一とみなす種族が登場していた。彼らについては考えることこそが力であり、それは現実と同等なのだ。なんていつたつけな？そう、たしかトラベラー、旅人と呼ばれていた気

がする。私は子供の頃、このエピソードが好きで何回も見ていました。
考えが、そのまま直接的に現実的な影響力を生む世界。そんな世界
に住めれば、わくわくするような体験ができるのだと子供ながらに
考えていた。もちろん、当時はその考えが現実となることはなかっ
た。しかし、今こうやって現実に、現実のルールが適用されない事
象に直面すると、やはり私は混乱してしまう。私は思想の中で誰か
に刺されたのだろうか？誰かの思想が現実的な力を持ち、行使され
たのだろうか。

私はもう一度首を振った。

わからない、と私は思った。

私、なくてはならないもの（後）

そしてもう一つ、私には考えるべきことがある。私を刺した男についてだ。あの場面を思い出したくはない。でもしつかり記憶をたどらなきやいけない。思い出しておく必要がある。

頭が鈍く痛む。無意識が私を守ろうとしているのかかもしれない。もしかしたら私は思い出すべきじゃないのかも知れない。

私は目を閉じて深呼吸をした。

それでも知らなきやいけない、と私は心の中で反復した。私はもう一度ゆっくりと息をはいて、自らを記憶の中の展望台へと導いた。

私は刺されて地面に倒れ込んだ。胸を見ると血が流れ出ている。喉から呼吸とも言葉ともとれない空気が流れ出る。視界の端が次第にぼやけてくるなかで、何とか犯人の顔を見なければと顔を上げる。徐々に狭まつてくる視界の中央に、血の滴るナイフをもつ男が立っている。私は意識を集中する。鼻筋が通っている。目は二重だ。特に特徴はないけれどハンサムな顔だ。しつかりとした顎をしている。体つきもいい。学生時代に、運動部に所属していた体だ。いや、彼は実際に運動部に所属していたのだ。私は彼がハンドボール部に所属していたことを知っている。彼が笑顔で映っている写真をよく覚えている。幸せそうに、ピースサインをカメラに向かってしている。彼。そして、その隣に映っている女性を私はもつとよく知っている。とゆうか、誰よりもよく知っているといつていいかかもしれない。彼はナオコの横で幸せそうに笑っていた。それはナオコが私に最初に見せてくれた彼氏とのツーショットだった。自慢げに写真を見せていた。

「コウだ。

間違いない、私を刺したのはコウだ。

目を開けた時、世界が歪んでいた。そこはすでにさつきまで私がいた病室ではなかつた。表層的には変わらない。硬いベッド、無機質な窓、無愛想な壁。全ては同じだ。でも私の全細胞が私に告げていた。

何かが起こつてゐる。私の周りで何かが入れ替わつてしまつたのだ。

ナオコに会いにいかなきやいけない。今すぐに。今ならまだ終電に間に合つはずだ。

私は誰にも言わずに病院をでた。

私が、かならずどこに（1）

私が駅に着いた時にはもう東京行きの特急電車は終わっていた。駅員は申し訳なさそうに、翌日の始発の時間を教えてくれたが、私はどうしても一晩何もせずに過ごす気にはなれなかつた。不満そうな顔をしている私を見た駅員は、寝台列車ならあと30分後に出発するものがあると教えてくれた。私が話せないことに気づくと、いつそう申し訳なさそうな声で、すいません、と言つた。

私は寝台列車のチケットをすぐに購入した。

プラットフォームにはほとんど人気はなかつた。学生らしい男がベンチに座つて、コーヒーを飲んでいた。南極に取り残された男が必死で残り一つのホッカイロにしがみつくように、大切そうにコーヒーを抱えていた。私はその男から少し離れた場所にある柱に寄りかかつて、ポケットから携帯を取り出した。やはり母には言つておくべきだらう。といつても、声が出ない状況では無言電話に終わってしまうためメールで伝えるしかないのだが。

母はかんかんになつて怒るだらう。でももつどうしようもない。私はここにいるし、なんとしてでもナオコに会いに東京にいく。

携帯はすでに充電が切れてしまつていた。ボタンを押しても、ただ黒い画面が静かに私をにらんでいるだけだつた。考えてみれば、昨日の夜から充電していない。結婚式に出かける前に充電したきりだ。もちろん充電器もない。会つたとしても深夜のプラットホームで充電なんてできる訳がない。私は公衆電話を探して家に電話をかけようかと迷つたけれど、結局やめてしまつた。しかたない。今かけるのも、明日の朝かけるのも、たいした違ひはない。ナオコにも連絡できなければ、彼女の家はわかつてゐるし、大丈夫だらう。

私は携帯をカバンに放り込んで、電車がくるまでの時間を柱の影で震えながら静かに待つた。

電車は控えめに言つてとてもすいていた。車両にはまばらに3人が座っていた。みんなうつむき加減で、これからあの世に向かう魂の一団のようだ。電車は、一瞬金属がきしむような音を出した後で、静かに滑り出した。いくつかの夜光灯が白く灯しだす富山駅が徐々に小さくなっていく。車内同様に車外にも無音の世界が広がつているような気がした。雪がすべての音を包み込んで消してしまったようだった。

私はシートを大きく後ろに倒し、座席においてあつたブランケットを顎の下まで持ち上げた。眠れないと心配していたのが、嘘のように強烈な眠気が私を眠りの中へと引きずりこんだ。

短い夢の中で、私は魂の一団の一員となっていた。厳かな気持ちで、あの世へと向かう列車に静かに揺られていた。ただ、私は悲しくはなかつた。なぜならそこにはナオコがいるとわかつていたから。彼女は私を待つていていたのだ。やがて顔のない車掌らしき男がやって来て、私に切符を見せろといつた。もちろん、その男に口はない。だから、実際に音を発した訳ではない。でも、確かにそういったようには聞こえた。切符はないと私は答えた。残念ながら、切符を買ったような記憶はないし、だいたい自分がいつからこの列車に乗っているかも覚えていない。しかし、顔のない車掌はもう一度、切符を見せると無音に言つた。切符はない、と私は繰り返した。そうすると、顔のない男は、それまでなかつたはずの口を大きく開いた。何の予兆もなく、何もなかつた場所が、ぱくりと割れて口になつてしまつたのだ。そしてその口しかない男は、金属音のような甲高い奇声をあげ始めた。頭が割れてしまうかと思うほどに不快な音だつた。やがてそれまで顔をうなだれていた乗客たちが顔をあげてこちらを見た。彼らは車掌と同じように、顔のない人々だった。彼らは、存在しない目で私に軽蔑の視線を向けていた。

「まもなく大宮駅に到着します。お忘れ物のないようご準備ください」という車内アナウンスで私は目を覚ました。

私がならずどこかに（2）

「まもなく大宮駅に到着します。おおりになるお客様はお忘れ物のないよう」、「準備ください」という車内アナウンスで私は目を覚ました。私は不安になつてあたりを見回してみたけれど、口だけの車掌や、顔のない魂はもちろんなかつた。顔のある人々が、忙しそうに荷物をまとめている。

朝の大宮駅は昨夜の富山駅とは打って変わって人で溢れていた。とてもじやないけれど同じ世界の風景には見えない。人々は地獄から抜け出すための最終列車に乗り込むような形相ですでに満員の電車に乗り込んでいく。五分後には次の電車があるというのに。

「どうせいいにれど、そんな電車に乗るにあたるには思れなかつたのでカフェを探して朝食をとることにした。時間はある。急いで地獄から抜け出す必要はない。ナオコはどうせ会社に言つてはいるはずだ。携帯の充電器がないのでメールはできないし、電話はかけられない。結局は彼女が帰宅するまで待つしかない。合鍵がポストに入つていてることを私は聞いているし、ポストの暗証番号も知つている。ナオコが教えてくれた。何かあればいつでも鍵は使っていいからねと言わわれている。でも待つたほうがよさそうな気がした。彼女を驚かせたくはない。

ちょうど改札をでた所にスター・バックスが見えた。駅の改札前の広場を見下ろす絶好の位置だつたので、私はエスカレーターで上に上ることにした。ホットサンドとコーヒーを頼んで、窓際のカウンター席に座つた。大きな窓が広場を見下ろすように広がつていて、下を歩く人々がよく見えた。そこから見ると、人の流れがよくわかる。いくつかある駅の出入り口から改札へと向かい、大きな流れができていた。それはよくみると川の流れのようにも見えたし、ありの大群のようにも見えた。

私はそんなせくせくと歩く人々を上から見下るしながら「コーヒーを飲んだ。そして彼ら、彼女らがこれから送ろうとしている様々な種類の一日を想像してみた。あそここの男性は何かとんでもないミスを犯して上司に怒られるかもしない。あの高そうな鞄を持った男性は部下に食事をごちそうするかもしない。赤いコートの女性は旦那に内緒で会社の同僚とラブホテルに行くかもしないし、あそこの学生は今日処女を失うかもしない。今晚プロポーズをするために予約を取つていてる男もいるかもしない。そう考えると、そこをあるいている人々の全てが、自分の過去、現在、未来のすべての可能性のプロジェクトであつてもよい気がして来た。そうだったかもしぬれない自分。そうであるかもしぬれない自分。そうなるかもしぬれない自分。そんないろいろなバージョンの自分たちが、今眼下を早足に歩いている。それらの自分たちの中から、今ここでコーヒーを飲んでいる自分を選んだ理由はなんなのだろうか？一体何が私に今の自分をそれらの無限の可能性の中から選びとらせたのだろうか？

私がならずビにかに(3)

私は朝食を終えるとネットカフェの看板を探した。最初に田についた店に入り、そこで母の携帯宛にメールをした。ナオコに会いにいくことにしたの、大丈夫だから心配しないでとだけ簡単に伝えた。ナオコの携帯にもメールできたらよい、残念ながら彼女のアドレスを空では覚えていなかつた。

特に何もすることがないので、設定時間の3時間がくるまで漫画を読んで過ごした。ちょうど子供の頃に読んだ覚えのある懐かしい漫画が棚にならんでいるのが見えたからだ。

時間がくると退出して、あてもなく大宮駅周辺を散策した。お腹が空いた頃に時計を見てみると時刻は午後1時半を少し回ったところだつた。私はおしゃれそうな看板を出していたイタリアンレストランに入りゆっくりと昼食をとつた。その間、不思議と言葉が話せないことが不自由でないことを考えていた。昨日の駅にしても、今日の朝のスター・バックスも、そしてネットカフェでも、私は一言も話していない。ディスプレーを指差したり、カウンターの上の料金表を指差すだけで、全ては円滑に進んでいった。問題なく、ホットサンドを注文できだし、3時間パックも注文できた。対応したレジの人々は私が話せないこさえ気づいていないようだつた。そう考えるとなんだかおかしくなつた。人々は話を聞いているようで、何も聞いていないのだ。

その時私は気づいた。

どうしてナオコは私にこんなに長い間連絡をしてこないんだろう?

母の癌の知らせ以来、私は自分のことばかりに気を取られていた。私が必要としている時に、ナオコの返信がないことに腹だつてたてたこともあつた。でもよく考えてみれば、私はナオコが連絡してこないことをただ不満に思つていただけで、それが何か異変の現れであるとは考えてこなかつた。彼女に何かが起こつて、それが理由で

しばらくの間連絡がない可能性だつてある。いやその可能性は高い。考えれば考えるほどに、そうとしか思えなくなつてきた。コウが私の前に現れた昨晩の出来事にしたつて、私をここに導くためのメッセージだつたのではないだろうか？すこし飛びはねてしまつている話のようにも聞こえるが、私の中にはすでに確信のようなものが芽生えてきていた。そうだ、声をなくしたことにして、私にそのことを気づかせるためだつたのではないだろうか。そう考えるとつじつまが会う気がした。私の無意識だか何かが私にメッセージを送つていたのかもしない。

そう考えるといても立つてもいられなくなつた。どうして今まできづかなかつたのだろうか？胸の中で不安が膨れ上がり、心臓を圧迫していた。それと同時に自分に対する怒りが頭を支配した。すぐにナオコのマンションに向かうこととした。デザートなんて食べている場合じゃない。行かなきゃいけない。

大宮駅からナオコの家までは一度だけ電車を乗り換えて20分程度の道のりだ。でもその20分は永遠に終わらないかと思うほどに長く感じられた。扁平に引き延ばされた時間の上を進んでいくようにいつまでたつても時計の針は進まなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9245m/>

僕と私。

2011年1月5日19時25分発行